

古墳確立期土器の広域編年

・・・東日本を対象とした検討（その3）・・・

田嶋 明人

は じ め に

本稿では信濃を対象とする。

信濃は、「赤い土器のクニ」といわれる強烈な個性をもった「箱清水様式」を生み出した地域である。また、「北信は高坏・器台という、西日本弥生土器の器種が到達した東端の地」と評された地域でもある(佐原1976)。一方、北陸からは関東への門戸の位置を占める。中野市・柳沢遺跡での銅戈、銅鐸の埋納はあまりにも象徴的に思える。そして北陸系土器がみられることから親近感もあった。このようなことが信濃を検討の対象地域とした理由であったが、信濃が、関東を三分する中部高地型櫛描文土器群の核となる地域であることを検討の中で知った。結果としてではあるが、今後の関東での検討の大きな拠り所となると思っている。

信濃は広大な地域を占めており、土器様相も地域単位で異なる。本稿では北信を軸に、東信、中信の状況を援用しながら検討をすすめる。南信は尾張、美濃等東海地域との関連を知る上でも重要な地域であると認識しているが、土器様相において他の信濃地域と大きく異なることから、一つの地域として別に勉強の必要があり、ごく一部の引用に留めざるを得なかった。

対象とする時期は、V様式から古墳時代中期あたりまでとした。青木一男氏の編年、千野 浩氏の編年、富沢一明氏の編年を軸に検討をすすめた。また、上記三氏はもとより笹沢 浩氏等々、多くの方々の論考に接し勉強させて頂いた。V様式から青木6期までの推移では、強引な引用も多々したように思われるが、南加賀地域(漆町編年)での推移と共通した動きを多く確認できた。古墳中期、漆町13群併行期では、漆町編年では検討できていなかった多くのことを学んだ。一方、信濃の検討でも多くの課題がでてきた。それらには今後の作業課題もあれば、漆町編年の再検討に係わるものもある。私的には課題が多少は明確になったともいえるが、今後検討を進めていく中で、これら課題のいくつかを整理できるのか、はなはだ心もとない。

箱清水土器についてはどうしても身に付かなかったが、ようやく成稿できた。この間、多くの方々より種々ご教示頂いた。なかには、学校の給食時間に定期便のように電話し、ご教示をいただいた方⁽¹⁾もおられる。また、多くの方々より資料の提供もいただいた。この場を借りて感謝申し上げます。

I 併行関係の検討

1 併行関係の検討

1993年、新潟で日本考古学協会により「シンポジウム2 東日本における古墳出現過程の再検討」が開催された。そこでは東日本各地の土器編年が示され、併行関係も模索された。それが「新潟シンポ編年」として、現在も、本稿での信濃、そして関東、東北で広く用いられている。

「新潟シンポ編年」は、漆町編年を仮の軸とし、共通の時間軸で古墳出現過程の整理を目指したものであった。併行関係のすりあわせでは、かなり精力的な議論があったと記憶しているが、最終的に

は各地域での編年発表者の判断に委ねられた。

それから10年余を経た。関東・東北で用いられている現在の「新潟シンボ編年」は、筆者の理解と異なっている。中でも8期から10期の理解で大きく異なる。本項での信濃においてもしかりである。

そのことはともかくとして、本稿（その3）以降の検討では、「新潟シンボ編年」と具体的に係わることとなる。「新潟シンボ編年」の大方の理解と筆者の理解が異なっているのは確実なので、本稿では、「新潟シンボ編年」での「期」と漆町編年での「群」を必要に応じて併記する。煩雑となるが、そのことで漆町編年からみた「新潟シンボ編年」の理解を示していきたい。

2 吉田式・箱清水式（青木1期から3期）

「箱清水式」は藤森栄一により設定された。それも1936年であることを知って、驚いた。その後、神村透、桐原健、笹沢浩、森島 稔らの研究をへて、笹沢により吉田式→箱清水式→御屋敷式という弥生後期土器編年の大綱が提示された（笹沢1977）。該期に限らないが長い研究史をもつ。

ここでは、笹沢の編年大綱後の研究成果。具体的には北信地域での千野 浩（千野1992）、赤塩仁（赤塩1994）、青木一男（青木1993、1997a・1998a・1999）、土屋 積（土屋1993、1998）等と中部高地を対象とした笹沢の編年（笹沢1987）等によりながら、漆町編年との併行関係の検討をすすめる。時間軸は青木編年（青木1998a）によることとする。

表1は、笹沢を除く上記4氏の編年の標識資料を一覧したものである。各氏編年の併行関係を横軸に反映させるよう試みた。作成にあたっては、主として青木（青木1998aほか）、土屋（土屋1998ほか）、前島 卓（前島1993）の整理を参考としたが、未消化は否めない。あくまでも目安であることをあらかじめお断りしておく。表1での新潟シンボ編年との併行関係は信濃での大方の理解によった。

1) 青木1・2期（1段階～3段階）

青木1～3段階 青木2段階までは北陸系形式との明確な供伴資料はない。青木3段階では、長野市・塩崎45号住に擬凹線文系甕が（図1-1）みられる（長野市教委1991）。北陸北東部では口縁部の伸張化を時間軸とできないことから時期の特定が難しい形式である。漆町2-1群併行期にもみられようが、大枠漆町編年V-3（仮称）併行期を下限とする型式とみたい。該期の併行関係を推定できる希少な資料とできる。

他に、該期古段階とできる長野市・吉田11号住の（長野市埋文2001）内面へう削り調整の甕（図1-2）が北陸系との関連で指摘されている（森本2006b）。類似型式は、千野が北陸系とする（千野1993a）本村東沖105住の甕（長野市埋文1993）等々、越後では長岡市・横山1号住（広井1993）にもみられるが、時間軸での検討は難しい。長野市・石川条里（宮之前地点）SB2とSB7にも古相の北陸系甕（長野市教委1994、47図9、48図16）がみられるが（千野1994）、竪穴が密集して営まれていることや、時間軸の特定が難しい形式であることから、これまた併行関係の確定はできない。

青木3段階以前については、今後の資料の増加を待つことになるが、次に検討する青木4段階が漆町2群と併行することを踏まえるならば、青木3段階がV-3期にあたりと併行する可能性が高いとしたい。

2) 青木3期（4段階～6段階）

北陸系形式との供伴資料は多い。千野（千野1993a）、赤塩 仁（赤塩1994）、青木（青木1996）、土

表 1 北信地域の編年と標式資料

青木 1997a・1998a			青木 1999		赤塩 1994		土屋 1998		千野 (1992)		新潟 シンボ編年			
1 期	1段階	中条2号住 塩崎小学校84号住	箱 清 水 Ⅰ 式	中条2号住 塩崎小学校84号住						V-1	吉田高校グラント 2～5住 塩崎小学校84号住		1 期	
	2段階	屋地7号住 塩崎109号住		屋地7号住 塩崎109号住							南大原4号小穴 周防畑 B17住 小島境4号住			
2 期	3段階	塩崎市道253号線地点 薬師堂5号住 篠ノ井大規模自転車道		塩崎市道253号線地点 薬師堂5号住						1 段 階	七瀬3号住			V-2
	4段階	本村東沖100号住 須多ヶ峰1号周溝墓 松原河道 篠ノ井高速道路 (様相1)	松原集落・旧河道資料		2 段 階	古段階 七瀬4号住 七瀬13号住 新段階 七瀬14号住 2段階 栗林30号住		V-3						
3 期	5段階	篠ノ井高速道路地点 SK7075 (様相2) 生仁遺跡	篠ノ井 SK7075 生仁遺跡					2段階 栗林30号住	1段階 七瀬4号住 七瀬13号住 がまん淵 SD01				V-4	
	6段階	篠ノ井高速道路地点 四ツ屋	篠ノ井高速道路地点 四ツ屋								2段階 七瀬14号住 栗林28号住			V-5
4 期	—	御屋敷			3 段 階	七瀬16号住 七瀬17号住		3段階 七瀬16号住 4段階 古段階 七瀬17号住 牛出古窯 SB08 新段階 牛出古窯 SB10		5 期 6 期				

(2)

屋 (土屋1998) 等の研究により、4 段階が新潟シンボ編年 2 期 (漆町 2 群)、5 段階が同・3 期 (漆町 3 群)、6 段階が同・4 期 (漆町 4 群) あたりと併行するとして整理されている。ここではこれら成果を追認することとなるが、6 段階については若干の整理が必要と考えている。代表的な事例を選んで、併行関係を再確認しておくこととする。

青木 4 段階 飯山市・須多ヶ峰 1 号墓の (高橋1966) 有稜高杯 (図 1-3) は、青木 4 段階、千野 V-3 の標識とされている。脚部の形から漆町 2-1 群までみられる型式とできるが、青木 3 段階に遡上することはないのか (森本2006b)。該期では古相の型式とでき、上限を示す資料とできよう。

篠井 SB7095 では (長野県埋文1997)、漆町 2 群併行の器台 (図 1-4)。本村東沖では (長野市教委1993)、11 号住で高杯ないし器台 (図 1-5)、41 号住で甕 (図 1-9)、61 号住で高杯 (図 1-6)、100 号住で高杯 (図 1-7)、110 号住で甕 (図 1-8) 等、良好な供伴事例がみられ、大枠、漆町 2 群併行の型式とできる。本村東沖の資料に関しては千野が詳細に検討している (千野1993a)。

該期下限を示す資料としては、本村東沖110号住での甕が分かりやすい。当該甕は「法仏型」の甕ではないが北陸南西部にもみられ、越後はもとより北陸北東部、北陸南西部そして東山陰にかけ広域に分布している。加賀での供伴事例では漆町 2-2 群を上限とし、漆町 3 群には消滅する (田嶋2007b)。41 号住の甕は漆町 2-2 群を上限とできようか (川村1996)。千野は供伴する箱清水型式を V-4 としている。また、根塚 1・2 号剣付近から北陸系小型高杯が出土している。この型式も漆町 2-2 群を上限とでき、酷似した型式が能登、宝達志水町・宿東山 6 住にみられる (石川県埋文1987)。

該期での北陸系形式は、本村東沖110号住を除けば、北陸南西部ではみられない形式で、漆町編年での型式観をそのまま適用できないが、須多ヶ峰 1 号墓の有稜高杯を根拠とすれば上限は漆町 2-1 群併行期にはのぼるとでき、下限は本村東沖110号住・41 号住の甕、根塚の小型高杯等から、漆町 3 群と接触しようが、大枠、漆町 2-2 群併行とみたい。

青木 5・6 段階 青木は、青木 5・6 段階を、箱清水Ⅱ式 3 段階に一括した (青木1999)。その点で、5 段階と 6 段階は小様式で一括されることとなったが、ここでは、中野市・七瀬遺跡の検討によ

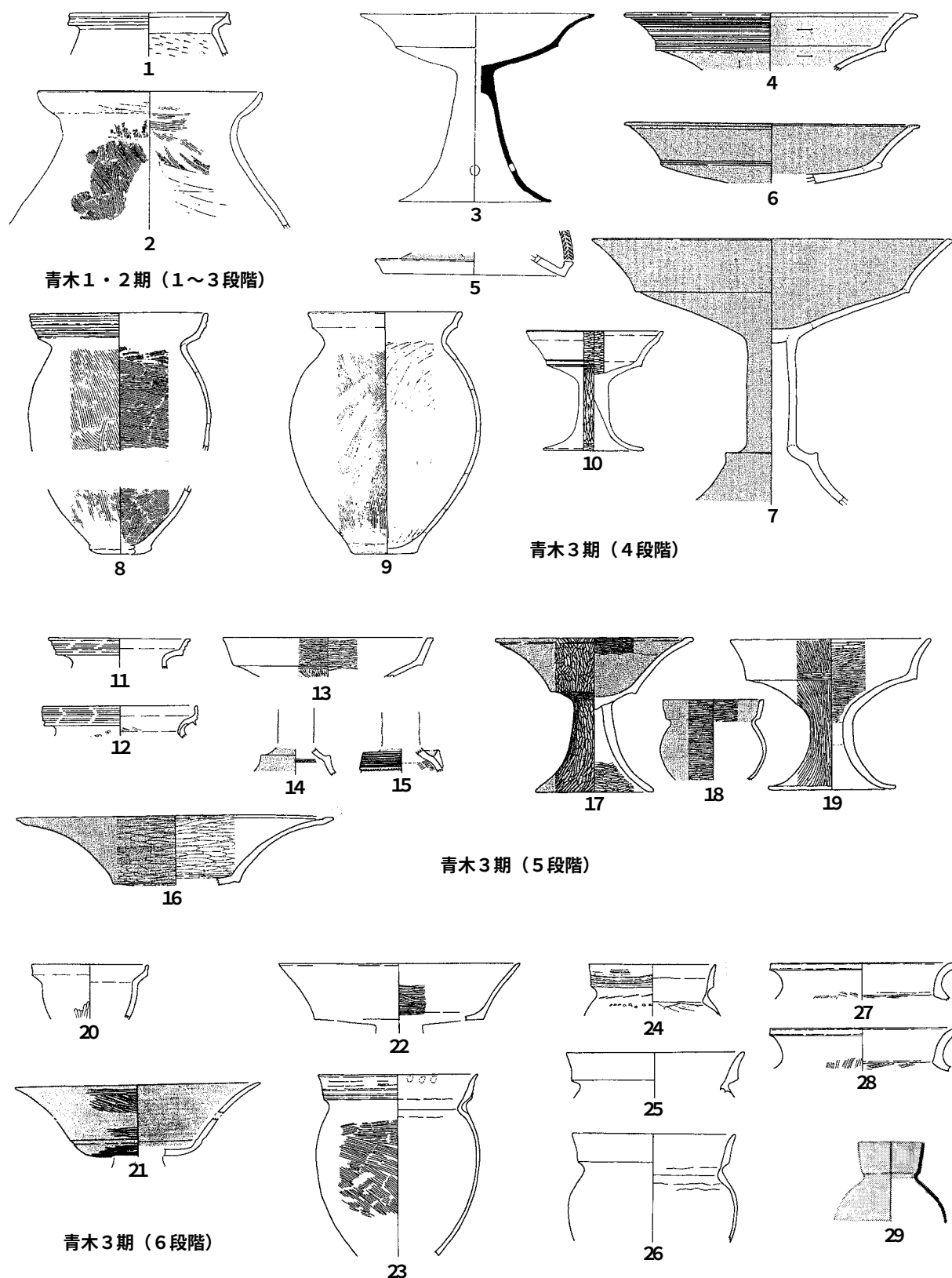


図1 北陸系土器1 (S=1/6)

1: 塩崎45号住 2: 吉田11号住 3: 須多ヶ峰1号周溝墓 4: 篠ノ井 SB7095 5: 本村東沖11号住 6: 同・61号住 7: 同・100号住 8: 同・110号住 9: 同・41号住 10: 根塚 11~15: 七瀬13号住 16: 栗林24号住 17~19: 栗林29号住 20: 七瀬14号住 21: 鶴前 SB29 22・23: 鶴前 SB4 24~28: 鶴前 SB28 29: 四ツ屋30号住

り設定された赤塩編年により（赤塩1994）、2段階古を青木5段階、2段階新を青木6段階に相当させ（青木1997a、土屋1998）、検討を進める。また、長野市・四ツ屋30号住については、青木が御屋敷期とし（青木1989・1993）、千野等は、V-5として箱清水式にとどめ（千野1992）、帰属様式で一致をみなかった経緯がある。このこととも係わり該期下限での時間軸で若干の整理が必要と考えている。

＜青木5段階（赤塩2段階古）＞ 中野市・栗林24号住（長野県埋文1994）の高杯（図1-16）、同・29号住の器台、高杯、小型有段壺等は（図1-17～19）、漆町3群併行とできる。同じく2段階古とする七瀬13号住の器台、高杯、甕は（図1-11～15）、2群から3群併行とできようか（長野県埋文1994）。該期も資料は多い。漆町3群併行として問題はない。

＜青木6段階（赤塩2段階新）＞ 七瀬14号住（長野県埋文1994）の鉢は（図1-20）、小型化を指標に漆町4群を下限とみたいが。土屋が該期とする（土屋1998）栗林28住の（長野県埋文1994）甕も時期の特定が難しい。以上が赤塩2段階新とされる供伴事例である。

一方、くだんの四ツ屋30号住では、古相とできるが漆町5群併行としたい北陸北東部系の小型有段壺を伴う（図1-29）。そして臼井が千野V-4～5、四ツ屋30号住を含めより古いものを含むとする長野市・鶴前SB04、SB28、SB29で（臼井1994）⁽³⁾、多量の北陸系形式がみられる（長野県埋文1994）。SB04の擬凹線文甕（図1-23）、北陸北東部系高杯（図1-22）は漆町5群が下限。SB29の高杯他（図1-21）も漆町5群が下限。SB28の有段口縁甕、「くの字」甕等々（図1-24～28）は漆町5群併行とみられる。これらは漆町5群併行期の資料からなり、中に漆町4群に遡る可能性をもつ型式を含むとできる事例である。中でもSB04の擬凹線文甕は、漆町4群併行に遡る可能性が高い。臼井の指摘どおり、四ツ屋30号住と同一ないし古い北陸系土器群と供伴している。

青木等は6段階を新潟シンポ編年4期併行（漆町4群）とする。筆者は、箱清水形式の型式観に不案内で、これ以上の検討はできないが、青木6段階を赤塩2段階新までとするなら、該期を漆町4群併行とできようが、四ツ屋30号住、そして鶴前の事例を6段階に含めるのであれば、漆町4群併行に限定できないことになる。森本は、箱清水新段階は白江式（漆町5群、筆者追記）を含むとする（森本2006a）。さらに、後述するように御屋敷期の標識資料である御屋敷4号住は漆町5群併行である。青木6段階、千野V-5の少なくとも下限、そして青木4期（御屋敷式）の上限が時間軸で重なるのである。

3 青木4期から6期

該期の編年には、笹沢（1988・1996）、宇賀神誠司（宇賀神1988）、花岡 弘（花岡1991）、赤塩 仁（赤塩1994）、土屋（土屋1993・1998）、青木（青木1996・1997a・1998a ほか）、臼井直之（臼井1997）等があり、ここでは省略したが先行研究も多い。表2には、各氏編年の区分と標識資料を一覧した。時間軸は、青木・土屋編年では両氏の新潟シンポ編年との併行関係の理解により、笹沢・花岡・宇賀神編年は、青木編年との対応での筆者の理解によった。ただし、時間軸の詳細は本文中で触れる。該期についても、青木の編年を軸に検討をすすめる。

1) 青木4期

青木4期（御屋敷式）は、上山田町・御屋敷4号住を標識とし、四ツ屋30号住、中俣13号溝を古段階、四ツ屋9住、安源寺遺跡等々を中～新段階とした（青木1989、1993）。その後、四ツ屋30号住を青木3期・6段階に変更した（青木1996）。新潟シンポ編年とは5・6期併行とした（青木1997a）。

表2 北信地域の編年と標式資料

青木 1998a		青木 1997a	白井 1997	土屋 1998	新潟 シンボ編年	笹沢 1988・1996
4 期 御屋敷	千曲市・御屋敷4住 (以下 青木1998) 古段階 長野市・四ツ屋30住 長野市・中俣13号溝 新段階 長野市・四ツ屋9住 中野市・安源寺遺跡			3段階 七瀬16住 <		

青木4期は、笹沢編年、花岡編年、宇賀神編年のI期と併行するとできよう。次段階とする青木5期の標識資料と笹沢編年他のII期の標識資料とが一致していることから推測できる。そして該期は御屋敷式に（森島1978）相当するとできようか。また、赤塩編年3段階、土屋編年第3～5段階も該期併行とみている。

このように整理したが、再三触れているように上限の標識資料の四ツ屋30号住の扱いで異論がみられた。青木が四ツ屋30号住を御屋敷期としたのとはほぼ同時期の宇賀神編年では、当該資料をI期古段階とし該期に含めている（宇賀神1988）。その後、青木は四ツ屋30号住を3期・6段階ないし箱清水II式・3段階とし、上限での標識資料の理解は決着したようにもみえるが、変更の根拠は明確でない（青木1998a、1999）。

新相段階でも青木が4期の下限を新潟シンボ編年6期としたことと係わり整合性を欠いているように思われる。土屋は、土屋5段階（牛出古窯SB05等）を青木5期、新潟シンボ編年7期併行とする（土屋1998）。青木5期は御屋敷式とはできない。土屋は御屋敷式との関連には触れていないが、後

花岡 1991	宇賀神 1988
Ⅰ期前半 千曲市・御屋敷4住 長野市・四ツ屋24住 上田市・梓木5住 小諸市・久保田 Y2・Y3住 小諸市・和田原 3～5住 飯田市・恒川 B15溝、B16・18・13住 A溝下層、A2	Ⅰ期古段階 千曲市・御屋敷4住、Y1住 長野市・四ツ屋30住 中野市・安源寺H1 上田市・西光坊3・8住 佐久市・下小平Y2住 松本市・三の宮 (Ⅰ期) 岡谷市・橋原 8・10・57・62・63住 諏訪市・千鹿社9・11住 飯田市・恒川B16住 松川町・的場11住 松川町・鼎山岸7住
Ⅰ期新段階 千曲市・御屋敷Y1住 長野市・四ツ屋9住・13溝 牟礼バイパスA1・A2住 B2住 中野市・安源寺H1 上田市・西光坊 3・4・6・8住 上田市・琵琶塚41住 松本市・向畑66住 飯田市・小池6住 松本市・弘法山古墳 佐久市・瀬の峰2号古墳	Ⅰ期新段階 牟礼バイパスA1・A2住 佐久市・瀬の峰2号古墳 小諸市・久保田Y3住 松本市・向畑37住 飯田市・恒川A5住
Ⅱ期前半 長野市・小島境6住 飯田市・恒川A5住	Ⅱ期古段階 千曲市・灰塚H1住 松本市・向畑 伊那市・堂恒外1住 茅野市・下蟹河原 一括資料 諏訪市・本城31住 飯田市・恒川A2・B2・B10住
Ⅱ期後半 千曲市・灰塚H1住 千曲市・五輪堂14住 望月町・後沖 4・6・11住 大町市・馬場49住 岡谷市・新井南2住 伊那市・堂恒外 下諏訪町・富部稲荷平 松本市・石行2住	Ⅱ期新段階 望月町・後沖4・6・11住 岡谷市・新井南2住

述するように牛出古窯 SB05は（長野県埋文1997）、御屋敷式とするか否かは別としても、箱清水系形式がみられる段階で、笹沢等のⅠ期新段階併行とみたい。また森本⁽⁴⁾は、このこととは別に、安源寺1号墳周溝資料は（中野市1999）、御屋敷古相の土器群とし、「白江式の末か後続する時期に併行（筆者註、漆町編年6群新から7群併行）」とする（森本2006b）。

以上のことから、各氏の編年を一括した議論はできないが、該期での様式区分、御屋敷式の評価等については別項で触れることし、ここでは四ツ屋30号住の段階から笹沢等Ⅰ期新段階あるいは土屋5段階までを射程に併行関係を検討する。該期も北陸系形式との供伴事例は多い。

青木4期の古い事例には御屋敷式の標識である御屋敷4号住がある。北陸系の形式はみられないが、供伴するS字甕B類（古）は、先稿（その2）で、主に漆町5群に併行するとした。赤塩3段階の七瀬16号住の小型有段壺は（図2-1）、北陸南西部の形式とはできないが漆町5群、新しくみて6群併行とみたい。S字甕A類、B類が供伴する。御屋敷式は東海系形式の波及を重要な指標の一つとする。先述の四ツ屋30号住には東海系形式がみられないとするが、東海系と供伴する御屋敷4号住、七瀬16号住と時間軸で重なる。

これらより多少新しい事例では、鶴前 SB05、上田市・下町田 SB17（上田市教委2000）で漆町6群とできる高杯（図2-5・6）。柳町 SI22で（飯山市1996）漆町5～6群併行とできる小型有段甕等がみられる（図2-2・3・4）。ここでとりあげなかった事例も含め、漆

町6群併行の資料は多い。

新しい事例では、赤塩3段階の七瀬17号住で漆町6群でも（新）とできる擬凹線文甕（図2-7）。鶴前 SB37は良好な一括資料とはできないが、漆町6群の最新ないしは漆町7群併行としたい月影系小型甕と（図2-8）、布留系の甕（白井1994）、S字甕B類がみられる。そして、牛出古窯 SB05では、定量の箱清水系形式とともに、布留甕が供伴している。布留甕は大型破片であり、布留甕のみの混入の可能性はまずないとできよう。口縁部は明瞭に肥厚している。時間軸は幅をもたせるしかないが、漆町編年では、漆町7群新相を上限に漆町8群あたりの型式とできよう。供伴する直口壺も似た時期とみて矛盾はない。牛出古窯 SB05は竪穴が重複しており、時期幅をもつ可能性もあるが、土屋がSB05と同じ第5段階とするSB06・SB09等の竪穴資料でも箱清水系形式を伴う。定量の在来形式がみられる下限を検討できる資料として注目したい。さらに、笹沢等のⅠ期新段階の資料には、向畑37号住（松本市教委1990）、中野市・安源寺H1住で（金井1982）S字甕C類が伴う（東海考古学2000）。C類は漆町7群以降と併行する型式とできる。

青木4期については、漆町6群頃の資料が顕在するとできるが、標識である御屋敷4号住をはじめとして新潟シンポ編年5期、漆町5群併行期まではのぼるとできる。そして北信でのS字甕の供伴事例は、現状で新潟シンポ編年5期をのぼらないとできよう。なお、四ツ屋30号住はもとよりであるが、鶴前例で示した新潟シンポ編年4期、漆町4群併行まで遡る可能性をもった土器群についても御屋敷式との関連で検討が必要と考える。下限は、新潟シンポ編年7期、漆町7群併行期までは下り、一部であっても漆町8群と併行するとしておく。

付言するならば、笹沢等Ⅰ期新段階の漆町7群併行期頃は、箱清水系形式が定量的に残る段階とできるが、在来系形式を含む土器群と含まない土器群とが併存していた可能性も考えておく必要がある（笹沢1988）。青木4期なかでも新相、そして御屋敷式の様式評価は、ここでの時間軸とは別の議論も必要のように思われる。

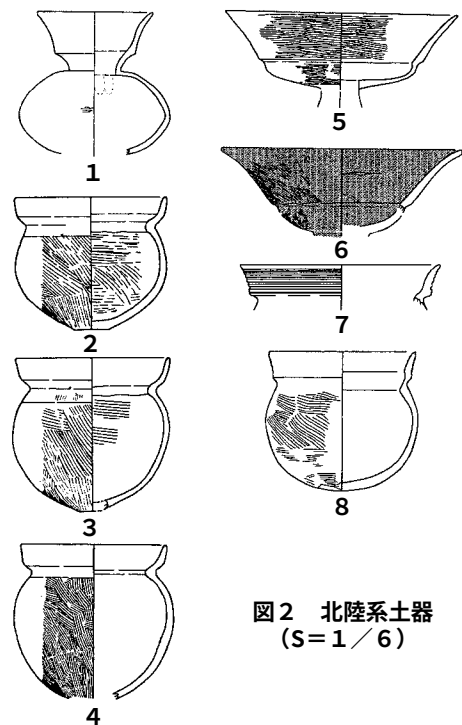


図2 北陸系土器
(S=1/6)

2) 青木編年5期、6期（篠ノ井期）

青木は、篠ノ井遺跡群の資料を用い、様相①から様相④の4細分編年を示し（青木1997a）、その後、他遺跡の事例も加え、様相1から様相5の5細分編年を提示、様相1から3を5期、様相4・5を6期とした（青木1998a）。表2に示したように、青木5期は、笹沢、花岡のⅡ期、宇賀神のⅡ期古段階。6期は、宇賀神のⅡ期新段階と併行しよう。表2にはあげなかったが千野編年1段階も青木6期とできる（千野1993b）。

また、青木5期と6期は、臼井編年でのⅠ期とⅡ期に概ね併行するとみているが、とくに青木6期の後半にあたる様相5の石川条里SD1006、臼井編年でのⅡ期3段階でのSB7420・SD1006等は、漆町11群併行以降の資料を確実に含む。このことについては次項で検討する。

他地域との併行関係では、青木は、様相1～3を新潟シンポ編年7～8期、様相4・5を同・9期併行とする（青木1998a）。臼井は青木とは逆に、Ⅱ期2～3段階の併行関係を新しくみる（52ページ）。

青木は、篠ノ井期での組成、形式・型式の変化について詳細に検討している（青木1998a）。要点と思われる事項を中心に抽出・列記する（図3）。

- ・高杯では、高杯G（柱状脚高杯・屈折脚高杯）は様相3に若干認められ、様相4において主体となり、様相5に至って在来高杯としてほぼ定着する。
- ・器台では、杯部が有段状を呈するBは様相1に出現し様相4で終焉する。B1→B2の流れが想定できる。X字形のCは様相4に出現し様相5に盛行する。
- ・鉢では、様相1と2の間には新出系の小型丸底鉢E1、屈曲鉢F、有段口縁鉢Gが出現、様相3でE1、F、Gが定着する。E2の定型化は小型器台C、屈折脚高杯Gの定型化と連動しよう。（なお、ここでの屈曲鉢Fには図3のFとは別形式を含む。）
- ・壺では、中部高地型赤彩壺Bは、様相1まで構成要素となるが割合は低く、Bが変容したEと新出のGが新形式群を構成する。

二重口縁壺Dは、様相1以前には数例しか確認されていない。器種構成に一定量を占めるよう

になるのは様相2である。

壺は様相1～3に他系統の壺で構成されたものが、様相4～5において定型化を示す。

- ・甕では、ハケ調整く字甕は様相1以前に出現、中部高地型櫛描文甕Bと供伴、様相2でBが消滅、主要な構成となる。

ハケ調整く字甕のHは様相2で定着。ヘラミガキを施すGは中部高地型櫛描文系甕の変容したものと(G1)、Hにヘラミガキを施したものと(G2)がみられる。後者は様相3まで残存するが様相5ではみられない。そして、G1は1→2→3と型式変化し、Hは、時間軸に沿ってH1→H2→H3と構成比の比重を移動するとする。説得力のある有効な指標とみたい。

千種甕系は様相1以前に盛行するが、様相2以降は影をひそめる。S字状口縁甕は様相4にはほぼ消滅する。布留甕は様相2～3に若干みられる。

- ・そして、以上の変化を整理した表183では、様相1以前ないし様相1で出現した諸形式・型式が様相3まで継続、様相4で様相2ないし様相3で出現した形式・型式に淘汰される様子が、明確に示されている。

以上から様相1と様相2の間、様相3と様相4の間に大きな変化があるとしていることがわかる。そして、様相3は様相4に続く形式の出現と、それ以前の形式・型式がみられる段階としていることに注目したい。このあたりを踏まえ、該期の併行関係について検討する。青木の整理は、様式理解・区分を考える上でも詳細で重要な指摘がみられると考える。

青木5期(様相1～3)の上限と下限

青木5期の下限 順序は逆となるが、青木6期の併行関係を検討し、青木5期の下限を確定することからはじめる。青木6期は、様相4に篠ノ井体育館地点、様相5に石川条里SD1006等をあてる(青木1998a)。様相4の土器群は、篠ノ井遺跡ではSB118等、石川条里遺跡ではⅡ期2段階あたりに編年されている資料群等、多くの事例がある。

これらに共通する様相では、高杯の組成が屈折脚高杯となっていることを、まず指摘したい。ちなみに篠ノ井体育館地点では「屈折脚高杯で占められる」とする(青木1998a)。そして通常の小型器台に加え小型器台C、小型丸底壺等の精製器種が伴う。上記青木の整理のとおり、様相1以来の形式は該期に払拭されている。この様相は布留式中段階新相(森岡・西村2006)ないしは布留2式(寺澤1986)の特徴とできる。尾張では、廻間Ⅲ式終わり頃から松河戸Ⅰ式1段階併行。漆町編年での10群併行とできる典型的土器群である。新潟シンボ編年での10期にあたる。該期の併行関係については青木和明の的確な指摘がある(青木1990)。

このことでの議論はさほど必要でないと考えていたが、青木は様相5も含め新潟シンボ編年9期とする。そして、併行関係は新潟地方との対比によるとし、屈折脚高杯の「定着」を9期のはじめとする(青木1998a)。屈折脚高杯の「定着」、様相4にみる屈折脚高杯による斉一化した高杯組成は、新潟シンボ編年10期の指標でさえあったはずである。先稿(その1)、(その2)で検討したように、新潟シンボ編年での畿内、尾張、北陸南西部の併行関係は大枠で動かない⁽⁶⁾。付言しておくが、このことは森將軍塚の築造時期を新潟シンボ編年8期とすることにも連動している(青木1989・1998a)。横道にそれだが、青木6期、篠ノ井期の新しい段階は新潟シンボ編年9期ではなく10期併行とみる。したがって青木5期(様相1～3)は、新潟シンボ編年9期、漆町9群併行が下限となる。

青木5期の上限 青木5期は御屋敷式に後続し、箱清水系形式衰退後の土器群をあてる。上限にあたる笹沢等Ⅰ期新段階には、先述の牛出古窯SB05等の土器群が含まれると考える。牛出古窯SB05で

は弛緩しているとはいえ箱清水系の壺、甕、鉢がみられ、それら形式と布留甕が供伴している。先では布留甕の型式観から、漆町7群新相を上限に一部にせよ漆町8群と併行するとした。畿内編年では布留式古段階新相を上限に、布留式中段階古相あたりとなる。また、笹沢等Ⅰ期新段階にはS字甕C類の供伴事例がみられることにも触れた。

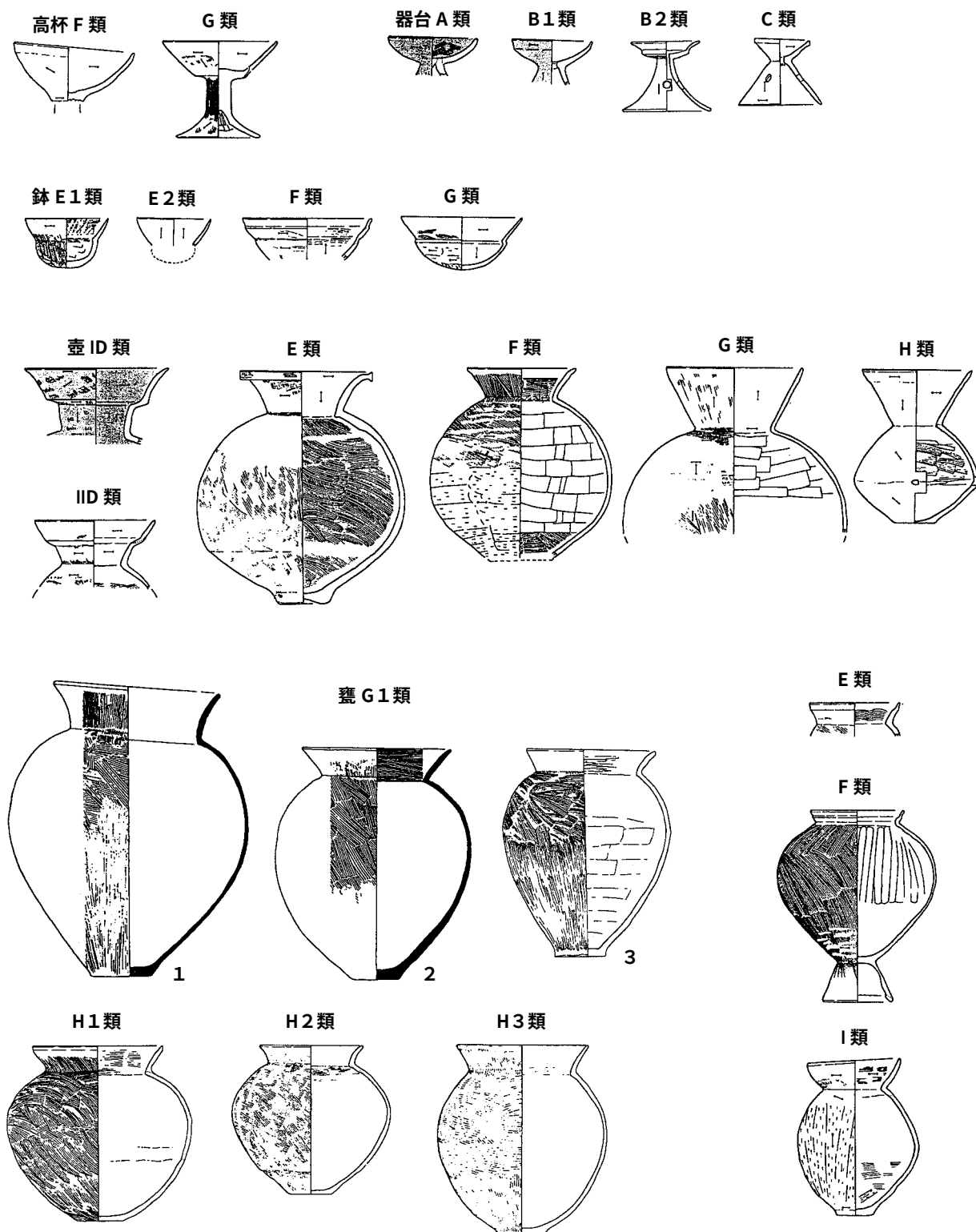


図3 形式(型式)分類 (S=1/6)
(青木1998aより作成)

以上から、青木5期の上限は、漆町8群、古くみても漆町7群と接触するあたりが目安となる。先では青木6期は漆町10群併行とした。このことから、青木5期・様相1～3は、漆町8～9群あたりと併行することとなるが、青木5期の資料から今少し検討を進める。

3) 青木編年5期

青木5期・様相1 様相1の標識とする篠ノ井SD6023・SD7014・SD7030は、溝資料であり時期幅がみられるが、箱清水系の形式は僅かに甕G1にその名残をとどめる程度である。笹沢等のI期新段階の頻度で箱清水形式をみることはできない。上限の目安となる。青木はこれら溝資料の中から古相とみられる型式を抽出し様相1を設定した。そして、小型丸底鉢E1、屈曲鉢F、有段口縁鉢Gは少なくとも組成としてはみられない段階とし、様相2と区別する。様相1の小様式を理解する重要な指標とできる。

篠ノ井SD6023等で、型式観を検討できる資料は筆者には僅かであるが、直口壺(図4-1)は漆町8群頃にみえる。不案内であるが東海系高杯(図4-2)も該期頃とみたい。小型高杯(図4-4)は、漆町7群併行としたいが開き気味の脚部からやや新しいか。そして複合口縁壺(図4-5・6)は、漆町7群併行までのぼるとしたい。赤彩された資料も多い。時間軸の検討では多分に保留部分を残すが、当該資料は漆町8群併行期の資料を確実に含み、漆町7群併行期に遡上する資料が含まれている可能性をもつと整理して、大過ないと理解している。

先で触れたように、青木は様相1を小型丸底鉢E1等の畿内系形式を組成としない段階として整理している。このことは、笹沢が古墳時代Ⅱ期を「畿内系の布留式土器の強い影響を受けた土器が登場する」(笹沢1988)。「畿内系の小型精製土器群三種の出現をもってはじまる」(笹沢1996)とした様式評価とは異なる。宇賀神・花岡編年Ⅱ期も笹沢と類似の理解をとる。確かに笹沢らの要約は、古墳時代Ⅱ期総体での評価であることを踏まえる必要があるが、青木が設定した様相1は、小型丸底鉢等の畿内系形式の明確な波及以前の様式として捉えているととれ、むしろ、笹沢が「各地域の土器やその影響を受けた土器からなる」としたⅠ期後半の特徴と類似する。そして、笹沢がⅡ期で「越後系が多量にみられる」とした様相にも通じるとみている(笹沢1988)。

当該資料は、笹沢等のⅠ期新段階なのか、Ⅱ期なのかの議論も残っているが、小型丸底鉢等畿内系形式を含まず、多地域の形式からなる土器群の存在を示す資料としたい。青木が溝資料を用いて、あえて様相1を設定した意図をそこにみたい。が、青木が設定した「篠ノ井期」の大別様式区分とは矛盾することになる。

青木5期・様相2・3 様相2には篠ノ井SB7508、同・SB70、灰塚H1住、様相3には篠ノ井SB7256をあてている。様相2・3は新潟シンボ編年8期併行とする。

図5は、長野市・小島境6号住と(青木和1984b)、能登、宝達志水町・宿向山8号住の資料である(石川県埋文1987)。小島境6号住は、笹沢等がⅡ期古段階の標識とする。また、青木は、先に引用したように千種甕(能登形甕)⁽⁷⁾は、様相1以前に盛行するが、様相

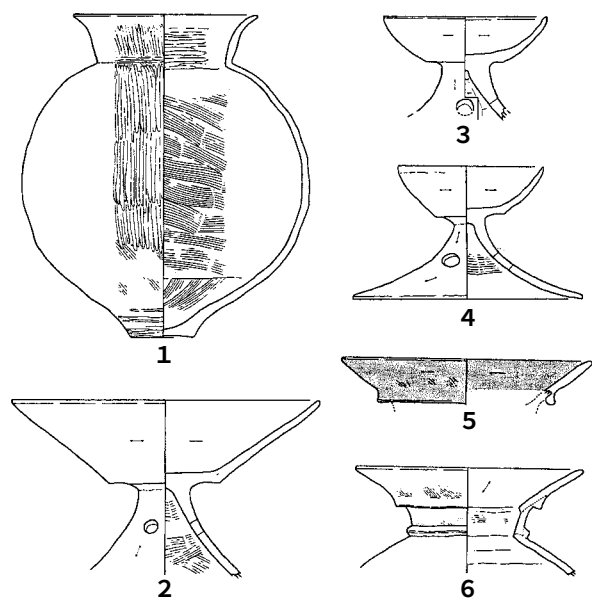


図4 篠ノ井SD7030出土の土器群(S=1/6)

2以降は影をひそめるとしていることから、様相1、ないしは様相2を下限とする土器群とできよう。

両者を比較するなら、小島境の甕(図5-1)と宿向山の甕(図5-2)の口縁部端面のしまつが酷似しており、図示しなかったが宿向山の壺の端面処理も小島境例と類似する。ほぼ同時期とみることができる。同時に密接な土器交流さえ窺わせる。宿向山8住の資料には小島境6号住と類似の複合口縁壺と、他に小型丸底壺E、小型器台Cの畿内系形式がみられる。一括性に検討の余地を残しているが、畿内系形式を供伴とできれば漆町8群併行期が上限となる。対して両者の甕は、能登形甕の型式観から漆町8群併行を下ることはないとみている。当該土器群が、先で触れたように、Ⅱ期で「越後系が多量にみられる」(笹沢1988)⁽⁸⁾とする資料にあたるとみたい。

以上は北陸系形式からの比較であるが、小型器台E2に注目し、東海編年からも検討してみたい。小型器台E2は、廻間Ⅲ式後半以降に盛行する形式とできる(赤塚1993)。様相2の篠ノ井SB7508では、古相の小型器台E2(図6-1)がみられる。廻間Ⅲ式2段階に編年されている型式と酷似している(赤塚1990)。先稿(その2)では、廻間Ⅲ式2段階は漆町8群と併行とした。篠ノ井SB7654でも、やや異形であるがより口縁部が伸びた小型器台E2(図6-2)がみられる。当該資料には、プロポーションで甕G1とできる型式と箱清水形式との関連を窺わせる壺がみられ、様相3と同時期ないし古いように思われる。そして典型例(図6-3)が柳田5号住(長野市1992)、典型とできないが口縁部が伸張した型式(図6-4)が、篠ノ井SB116にみられ(長野市1992)。他にも笹沢等のⅡ期の資料に散見できる。上記資料は青木様相3には留まるとみており、少なくとも様相3は、廻間編年でのⅢ式後半以降と時間軸で重なることを窺わせている。廻間Ⅲ式後半は、先稿(その2)では、漆町9群と併行し、一部10群を含む可能性を指摘した。

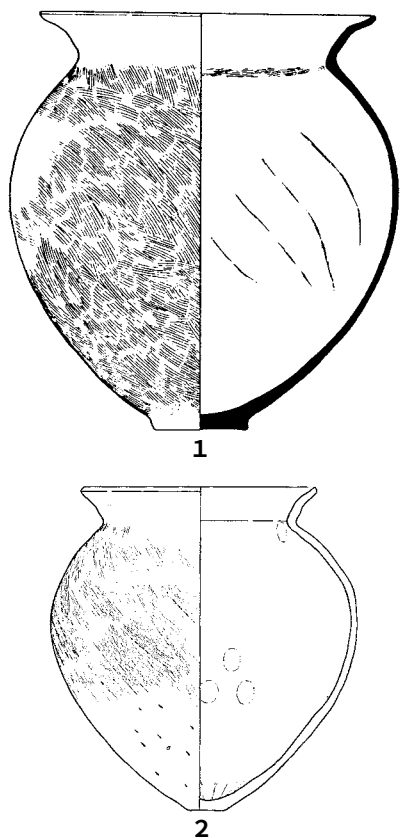


図5 小島境6号住と宿向山8号住の甕型式
(S=1/6)

1:小島境6号住 2:宿向山8号住

畿内編年との関連では、布留甕が松本市・石行1住(松本市教委1987)、飯田市・恒川1号溝(飯田市教委1986)、伊那市・堂垣外1号住(桐原1969)等でみられる。実見していないが、実測図にみる限り堂垣外は漆町9群を上限とする型式にみえ、先の二例はそれより古相とできる。恒川1溝は笹沢のⅡ古段階、石行1住は宇賀神のⅡ段階古段階、花岡のⅡ期新段階、堂垣外1住は、宇賀神のⅡ期古段階、笹沢・花岡のⅡ期新段階の標識資料である。鉢F(屈折鉢)では本村東沖SB4がある(図6-5)(長野市1995)。管見の範囲であるが北信での最古型式とみたい。布留式中段階中相(漆町9群)あたりが上限との教示をいただいている。そして様相3の篠ノ井SB7256にも屈折鉢がみられるが(図6-6)、本村沖SB4より後出とできる。当該堅穴では屈折脚高杯の可能性のある形式が供伴している。屈折鉢での本村沖SB4との型式差、図示しなかったが直口壺の型式観等々から漆町9群併行をのぼらないとみたい。

以上、様相2・3を北陸形式、尾張編年、畿内編年対照し概観したが、該期は新潟シンポ8期を含むとできようが、8期の中に留まらず、少なくとも様相3のSB7256は9期併行には確実に下るとできよう。また、様相2としている篠ノ井SB7508、灰塚H1、篠ノ井SB70についても、時間軸での整

理が必要と考えている。

青木様相③と屈折脚高杯 先稿では畿内系形式の波及との関連で、関東・東北域での屈折脚高杯の出現状況、分布に注目したいとした。様相③は青木6期に属するが、様相③での屈折脚高杯の状況を概観し、あわせて時間軸での目安を得たい。

屈折脚高杯については、青木が様相③として整理した篠ノ井 SB7213、SB7639、SB7649、様相③併行の SB7418等に、波及期の状況を考える良好な資料がみられる（青木1997）。高杯はGにあたるが、中実高杯であったり、杯部が特異な形状をもち、典型的な屈折脚高杯とは異なる（図14-2など）。これら形式は畿内系屈折高杯との関連で成立した東国域固有の形式群とみており、典型的な屈折脚高杯の波及ないしはそれに先行し盛行したと予測している。

SB7213には、部分的にヨコミガキがみられる中実高杯と小型器台 B1・C、小型丸底 E2 等が供伴する。小型器台 C（図6-7）は、布留式中段階新相とするのが妥当であろうが中相にのぼる可能性を残しておきたい。青木は小型器台 E1→E2の推移を指摘しているが、小型器台 E1 も供伴している。他の遺構資料には時間軸を特定できるまでの資料をみいだせないが、SB7639の直口壺は漆町9群併行に遡る可能性があるとしたい。SB7418では、本村東沖 SB4 に後続する複合口縁壺がみられる。形式は異なるが様相4の篠ノ井体育館地点の複合口縁壺より古相とみたい（長野市1990）。

これら様相③の土器群は、青木6期・様相4併行として整理されているが、様相4の標識とする篠ノ井体育館地点の土器群より先行するのは確実とみている。青木が当該資料を様相4としたのは、高杯Gの定着を様相4の指標としたことによると考える。

様相3の篠ノ井 SB7256に屈折脚高杯の可能性のある形式がみられた。供伴が1例であることから組成としての位置付けは明確でないが、様相3には出現していたとできる。そして様相③の土器群が様相3と近接した時間軸にあることは確かとできる。様相③自体の時期幅の整理を残しているが、高杯Gの明瞭な定量化、組成として組み込まれた段階とできる。様相③の様式帰属はともかくとして、定型化した屈折脚高杯が定量化する様相4に先行して、東国域固有の高杯群を組成とする特徴的な土器群がみられるとしておく。

様相③が漆町9群併行までのぼるのか、漆町10群併行であるのかは、今後の関東・東北域での資料を検討していく中で確定していきたいが、篠ノ井 SB7213での小型器台 C は、今後時間軸での検討をすすめる上での一つの重要事例とみている。

4 漆町11群から14群併行期

北信地域での該期編年には県内全域を対象とした編年も含め、笹沢(1988)、花岡(1991)、千野(1993b)、岩崎卓也(1996)、小林正春(1996)、臼井(1997)、鳥羽秀継(1998)、広田和穂(広田1999a)等がある。また、古墳時代中期の土器編年をテーマとした共同研究による、東信・富沢一明(富沢1999)、北信・広田和穂(1999b)、中信・直井雅尚、島田哲男(直井・島田1999)、南信・山下誠一

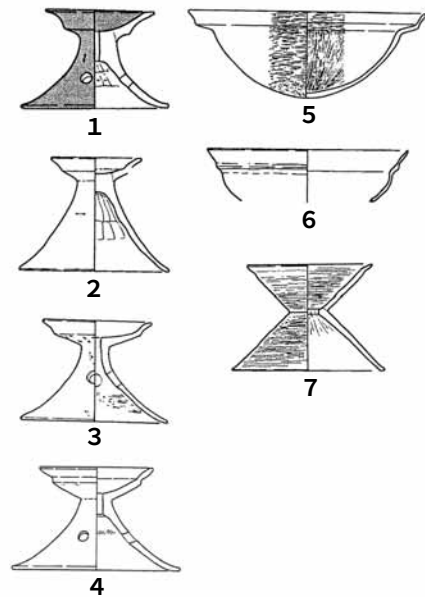


図6 外来系形式 (S=1/6)

1:篠ノ井 SB7508 2:篠ノ井 SB7654
3:柳田 YD3区5号住居 4:篠ノ井 SB116
5:四ツ屋 SB4 6:篠ノ井 SB7256
7:篠ノ井 SB7213

(山下1999) の編年がある。

第3表は、北信地域の編年を中心に、各氏の編年区分と標識資料を一覧したものである。⁽⁹⁾ただし、横軸については、様式理解や標識資料の扱いで微妙な違いがみられ、大枠でしか時間軸を反映できなかった。また、編年の中には漆町10群併行期からはじめる事例がいくつかみられた。ここでは漆町10群併行期は検討の対象とはしないが、それらについては各氏編年の完結性から掲載した。漆町10群併行期あたりからはじめる古墳時代中期編年は、信濃だけでなく関東域でも普通にみられる。このことについては別に触れることとする(70ページ)。

本項では、千野編年と東信地域の編年であるが富沢編年を併用して時間軸とし、各氏の標識資料、⁽¹⁰⁾編年区分と対応させるなかで、漆町編年との併行関係の検討を進めることとしたい。

千野2段階 漆町11群併行期を考えている。千野2段階は、漆町編年に即すならば、千野1段階が

表3 漆町11群から14群併行期の土器編年

北信 千野 (1993b)	北信 白井 (1997)	北信 鳥羽 (1998)	北信 広田 (1999b)	中信 直井・島田(1999)	東信 富沢 (1999)
第1段階 長野市・篠ノ井 聖川堤防地点 SB-118 SDZ-10		屋代・古墳3期 SK6005・SK9512 (石川条里資料)		1段階 松本市・堀の内 81・101住 松本市・白神場2住 松本市・向畑1住	1段階 高呂漆24住 琵琶塚22住
第2段階 長野市・ニツ宮 FM5区13住	第Ⅱ期 3段階 長野市・篠ノ井 SB7420・SB118 SK6406 第Ⅲ期 1段階 千曲市・屋代清水 4住・8住 千曲市・生仁31住			2段階 松本市・堀の内 81・101住 松本市・蒲田2住 松本市・白神場12住	2段階 佐久市・北西の久保 12・19住
第3段階 長野市・本村東沖 14・54・55住	第Ⅲ期 2段階 千曲市・屋代清水 5住		Ⅰ期古相 長野市・榎田1627住	3段階 松本市・ 高宮土器集中 松本市・山影30・32 ・33・37・44住	3段階 佐久市・北西の久保 6・15住 大道下44住
第4段階 長野市・本村東沖 26・27・30・ 31・37・66住 長野市・ニツ宮 FM1区1住 第5段階 長野市・本村東沖 1037 長野市・ニツ宮 FM1区9住 第6段階 長野市・本村東沖 50・51・57住	第Ⅲ期 3段階 千曲市・屋代清水 15住	屋代・古墳4期 SB5088・SB6057 古相 千曲市・屋代清水4住 新相 千曲市・生仁Ⅲ 1号祭祀 屋代・古墳5期 SB6012・SB5136 ・SB5190 長野市篠ノ井 塩崎小学校 2次52住 屋代・古墳6期 SB5047・SK5092・ SB5009 古相 千曲市・大境Ⅳ・Ⅴ 15住 新相 千曲市・生仁Ⅲ43住	Ⅰ期新相 榎田 88・355・361住 Ⅱ期古相 榎田 322・354・1404住 Ⅱ期新相 榎田380・383 806・1093住 Ⅲ期古相 榎田172・327住	4段階 松本市・向畑 11・12号墳 松本市・山影 11・18住 塩尻市・中挾34住 5段階 松本市・県町 64・71住 大町市・中城原 3号古墳 塩尻市・中挾 1・18住 6段階 松本市・平田里 1号古墳 大町市・中城原 6号古墳	4段階 上田市・国分寺周辺 339・375住 5段階 佐久市・下芝宮2住 佐久市・下聖端 19・22住 6段階 清水田2住

漆町10群併行、3段階が漆町13群併行とみられることから、漆町11・12群あたりを意図した段階とともとれる。そのことは千野の該期の要約からもうかがえる（千野1993b）。ここでは千野の2段階の理解と異なるとも思われるが、仮に、千野2段階を漆町11群併行期に限定して使用させていただく⁽¹¹⁾。なお、広田Ⅰ期古相は、千野編年3段階併行。鳥羽の屋代・古墳4段階は、千野2・3段階併行とするが（鳥羽1998）、千野4段階以降とみたい。

漆町11群は、小型壺F等（田嶋1986a、以下粗製小型壺と表記する）の出現、小型精製器種の衰退等を指標とした。このことは、笹沢、花岡、千野等も指摘している。

千野が該期標識資料として提示したのは二ツ宮FM5区13住の一例なので、資料の多い臼井Ⅱ期3段階によりながら併行関係を検討する。臼井Ⅱ期3段階は、標識とする石川条里SD1016にみるように、古い資料を含むが、大枠で漆町11群と併行するとみたい（臼井1997）。

石川条里SD1016での多量の粗製小型壺の出土は、加賀での豪族居館かと推定されている沖町の状況を彷彿させる（金沢市1992）。管見の範囲であるが、信濃においても、該期でこれだけの多量出土の事例は他にないのでなかろうか。該期粗製小型壺の特定遺跡⁽¹²⁾での偏在的使用を示す資料とみたい。沖町SD3d地区資料は、先稿（その1）で漆町11群としたものである。

小型丸底壺、小型器台等精製土器群の状況については、臼井編年の根幹をなす石川条里資料が膨大なことから咀嚼できていないが、該期で概ね衰退すると理解している。編年表に掲載されているⅡ期3段階の（臼井1994）、小型丸底壺、小型器台をみると、SK1046資料は（0127～0129・0131・0132・0134・0135）、他の資料と比較して、また漆町11群併行とするには古いともとれる。0127の小型丸底壺は、先稿（その2）で、東日本域固有の形式としたもので、漆町11群併行期まで下るとはできない。同時に、篠ノ井SB118も時間軸で先行する土器群とみているが、135～137が掲載されている。ちなみに当該資料は千野1段階の標識である（千野1993b）。漆町編年に即すならば、編年表での小型丸底壺、小型器台のかなり量が削除されることになる。該期に精製土器群が多少は残るとできても、衰退期とみたい。

なお、小型器台に関しては、後続の松本市・高宮第2号土器集中区等（松本市1994）や、

南信 山下 (1999)	信濃 笹沢 (1988)	信濃 花岡 (1991)
Ⅰ段階 飯田市・城 1・2・3・8住		
Ⅱ段階 飯田市・清水 59・69住	Ⅲ期古段階 長野市・下宇木B 長野市・駒沢新町 3号祭祀遺構 千曲市・城の内 7・10・15・18号住 飯田市・恒川 A4・B10号住 Ⅲ期中段階 長野市・駒沢新町 1号祭祀遺構 松本市・白神場12住 飯田市・清水方形 周溝墓Ⅳ	Ⅲ期1段階 長野市・駒沢新町 3号祭祀遺構 千曲市・城の内 7・10・15・13号住 飯田市・恒川 A4・B10号住 Ⅲ期2段階 長野市・駒沢新町 4号祭祀遺構 松本市・白神場12住 佐久市・市道2住 飯田市・清水方形 周溝墓Ⅳ 飯田市・恒川 TAN・KUR23住 豊岡村・城
Ⅲ段階 飯田市・細新 SB39・44・60		Ⅲ期3段階 小諸市・久保田H10住
Ⅳ段階 飯田市・ 田中・倉垣外地籍 16・23住 蒲田2住 殿原70住 丸山2住 小垣外25・26住 Ⅴ段階 飯田市・殿原 88・92住 飯田市・前の原 26・28住 Ⅵ段階 飯田市・ 田中・倉垣外地籍 125・129住 飯田市・新屋敷 SB73・76	Ⅲ期新段階 飯山市・照丘1号 方形周溝 長野市・牟礼バイパス B14住 Ⅳ期古段階 千曲市・城の内 BD301祭祀 千曲市・生仁H131住 長野市・県町1・11住 飯田市・天伯 B5・B28住ほか 飯田市・山岸36・52住 松本市・松ノ山窯 諏訪市・一時坂古墳 諏訪市・本城1号墳 駒ヶ根市・ 中通り下古墳 阿智村・中原11・13住	Ⅳ期 飯山市・照丘1号 方形周溝 飯山市・田草川尻 H3住 長野市・牟礼バイパス B14号住 千曲市・城の内 BD301祭祀 小諸市・五ヶ城7住 御代田町・前田H-60 佐久市・市道8住 駒ヶ根市・反目南 7・10住 飯田市・天伯 B5・B28住 飯田市・殿原70・88住 松本市・松ノ山窯

（臼井編年については、石川条里での標識資料は省略した）

篠ノ井 SK58（長野市2002）等で「小型器台」様の形式がみられる。その系譜・用途・分布域等々注目したい。

白井は、他地域との併行関係について「第Ⅱ期2～3段階は畿内編年（寺澤1988）布留2式後半から3式、東海編年（赤塚1994ほか）廻間Ⅲ式後半から松河戸式前半に該当する」とする（白井1997）。松河戸式前半がどの範囲を指すのか示していないが、布留2式後半が、廻間Ⅲ式後半と一部で接触するとしても併行とはできない。

富沢2段階 漆町12群と併行するとみたい。白井のⅢ期1段階、中信・直井、島田の2段階等が該当しよう。千野編年では2段階と3段階の間にあたるとでき、千野が報告している本堀 MB3 住は該期とみたいが（長野市1992）。また、笹沢Ⅲ期古段階、花岡Ⅲ期1段階は、千野2段階から該期に併行とみたい。そして、笹沢Ⅲ期中段階、花岡Ⅲ期2段階は、初期須恵器を模した甕形小型壺や（笹沢1988、花岡1991）、杯（花岡1991）が出現するとしていることから、該期資料と漆町13群併行期の資料を含むとみたい。

直井、島田は中信の資料を踏まえ、該期を高杯 A と小型丸底壺（小型壺 B）で構成され、杯の出現を次の3段階とする。黒色処理については、丁寧なヘラミガキを伴わないものが希にみられるとする。そして高杯や二重口縁壺、甕の型式変化にも触れ、「底部をケズリで丸くした甕 A、甕 B が確実に出現している」とする（直井1999）。千野は、丸底の甕 B 1 が千野2段階に存在する可能性があるとする（千野1993b）。該期ないし漆町11群併行期での甕形式の変化を考えるうえで重要な指摘としたい。直井、島田の要約は、該期の組成、形式・型式変化について分かりやすく指摘しているとみたい。

該期には高杯で新出形式がみられる。富沢は、高杯 C（図7-1）が該期に出現するとし、直井、島田も当該形式を高杯 C とし編年図にあげている。類似型式が松河戸Ⅱ式にみられ（赤塚・早野2001）、時間軸でも整合する。もう一つの形式に屋代清水8号住の（更埴市1992）杯部に2段の稜をもつ高杯がある（図7-2）。8号住の組成は該期とできるが、他の形式の型式観に不案内な（13）ことと、遺構単位での組成が該期組成を網羅しているとは限らないことから、該期に出現するとみたいが、確定できない。ご教示をお願いしたい。新たな高杯形式の出現は、該期小様式の重要な指標の一つと考えている。

富沢3段階・千野3段階 漆町13群古相と併行するとみたい。北信では千野3段階、白井Ⅲ期2段階、広田Ⅰ期古相が該当しよう。中信の直井、島田3段階も該期併行とみたい。そして、富沢が標識とする北西の久保6・15住（佐久市1984）、直井、島田が標識とする高宮土器集中区、中でも1号土

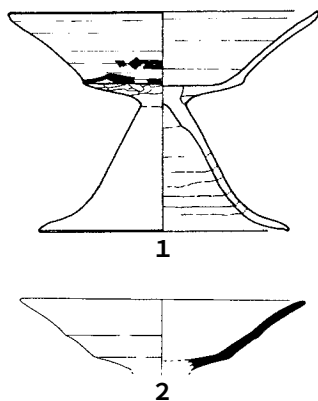


図7 富沢2段階の高杯（S=1/6）
1：北西の久保19号住（高杯C） 2：
屋代清水8号住

器集中区（松本市教委1994）の資料は、組成から千野が3段階の標識とする本村東沖14・54・55住（長野市教委1993）より古相にみえる。

漆町13群は、椀の出現・確立、椀形高杯等の出現、粗製小型壺の減少・消滅等を指標とし、新相・古相に2細分した。新・古の指標は、椀の出現期と、定型化・盛行期を象徴的指標としている。この区分によるならば千野3段階までは古相併行となる。そして、漆町13群古相が細分できることになる。この理解で良いなら千野3段階は、漆町編年では把握できていなかった様相となる。ここでは、様式細分はともかくとして、漆町13群古相併行期を富沢3段階と千野3段階に分け、その推移をみることにしたい。

<富沢3段階> 繰り返しとなるが、中信・高宮1号土器集中

区、東信・北西の久保6・15住。北信では篠ノ井 SK58 (長野市埋文2002)、長野市・榎田 SB1627 (長野県埋文1999) 等、千野3段階の標識資料より古いとみられる一群を想定している。祖形の椀がごく少量伴い、定量の小型壺がみられる組成に特徴をみたい。杯部に二段の稜をもつ高杯、椀形の杯部をもつ高杯も該期にはみられるようである。須恵器模倣の甕形土器も供伴する (直井1999)。

図8-1~6は、富山市・境野新1号竪穴資料である (富山文研1974)。図8-7~11は、高宮土器集中区から境野新と類似し地域色のみられる形式を抽出したもので、他に共有形式には通常の高杯、粗製小型壺、甕形壺等がみられる。境野新には明瞭な椀はみられないが、図8-4~6の鉢とも椀ともいえる形式 (原1989) ⁽¹⁴⁾ が供伴する。両者は組成と形式できわめて類似している。隣接しているとはいえ、北アルプスを背に位置する両地域の土器群の類似は特筆しておきたい。境野新1号竪穴資料については、高宮土器集中区との類似から漆町13群古相併行資料とみたい ⁽¹⁵⁾。

また先では、信濃では定量の粗製小型壺が伴うことを該期の特徴とした。高宮や時期幅をもつが篠ノ井井下祭祀では (長野市教委1992)、大量の粗製小型壺がみられる。祭祀遺跡ないしは「格」の高い遺跡での特別な在り方ともできようが、この様相は、漆町13群での「減少する。急速に量を減少する」とした評価とはとても一致しない (田嶋1986a)。しかも、該期でも新相と想定した千野3段階の篠ノ井の竪穴資料にも定量的にみられる。漆町編年での評価は13群新相も射程にしたものであるが、漆町13群は大枠で衰退期とした。より厳密な段階的整理と評価が必要となった。

<千野3段階> 千野3段階とする本村東沖の14・54・55竪穴資料等を該当させたい (長野市教委1993)。なお、内斜口縁 (直井1999) の杯を伴うことでは、次の富沢4段階との区分は微妙である。

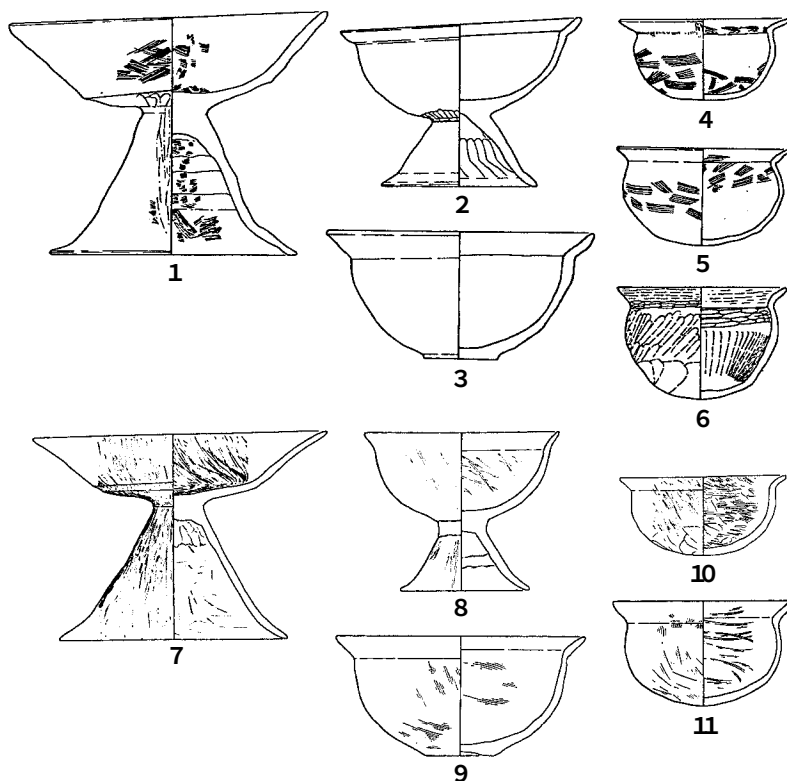


図8 境野新1号住と高宮の類似形式 (S=1/6)
1~6: 境野新 7~11: 高宮 (10: 1号土器集中区 7・9・11: 5号土器集中区
8: 6号土器集中区)

該期にも、粗製小型壺が多いとはできないが定量的にみられることに注目したい。次段階との大きな組成の違いとできる。椀は増加傾向にあるが多くないこと、須恵器の供伴事例がきわめて少ないことも漆町13群の新相と異なる。黒色土器は丁寧なヘラ磨きを伴わないもの以外はみられない (直井1999)。

椀形式の比較では、漆町13群新相の主要椀形式とできる図9の椀A (以下椀Aと仮称) が、千野3段階の資料には管見の範囲であるがみられない。小型で相対的に深いタイプを祖形ともできようが (原1989)、少なく

とも法量的にも安定した定型化したタイプはみられない。このことは以下で触れるが、該期を漆町13群古相併行とし、漆町編年では確定できていない段階と想定した主要な根拠である。

富沢4段階 漆町編年での13群新相併行の段階にあてたい。富沢は標識として国分寺周辺遺跡群339・375住をあげる（上田市1998）。北信では、千野3段階と4段階の間、広田Ⅰ期古相と新相の間、臼井のⅢ期3段階より古い土器群にあたると想定しているが、明確な資料を提示できない。このことから富沢4段階の土器群を抽出するのは難しいが、同じく東信の資料で花岡編年Ⅳ期の御代町・前田H-60（御代町教委1987）が該当すると考えている。中信の直井・島田4段階も、微妙であるが該期としたい。

まずもって該期の特徴を特定する。先行期の様相は先に触れたので、後出の様相を漆町14群併行と考えている花岡編年Ⅳ期にみる。花岡Ⅳ期は、椀が増加・盛行し（笹沢1988）、須恵器写しの杯形式が出現するとともに、黒色処理が確実に出現する段階とする。須恵器の供件事例も多くなり、TK47型式を中心とする時期とする（花岡1991）。小型粗製壺はみられなくなるとする。この様式的特徴は漆町14群と一致する。

ただし、花岡が、Ⅳ期は「細分が可能かもしれない」とするように、標識資料には、漆町13群の新相を含むとみている。先で触れた御代町・前田H-60である。当該資料には椀Aがみられ（図9-2）、供伴須恵器はTK208型式とする（佐藤1987、原1989）。椀Aは型式観から漆町13群新相併行とでき、須恵器の年代観も整合する。当該資料には、花岡がⅣ期の指標とする黒色土器、須恵器写しの形式は含んでいない。対して、先行する千野3段階と比較し椀が増加し、粗製小型壺はみられない。様式的帰属はともかくとして固有の特徴をもつ土器群とできるのは確かである。

そして御代町・前田H-60は、富沢が4段階の標識とする国分寺周辺339・375住、中でも339住に類似するとしたい。椀Aの型式観ではやや新しくもみえるが（図9-3）、該期としたい。富沢は該期の特徴を、杯A類、B類（筆者註椀A）が出現し、土器組成の中においても高杯を抜いて主体的位置になるとする（富沢1999）。漆町13群新相での椀が組成の主要位置を占める在り方と共通する。

一方、直井・島田4段階では、須恵器写しの杯が編年図に掲載され（直井・島田1999）、黒色土器が1例みられるとし（直井・島田1999）、明確な椀Aがみられないが、富沢の杯Aが伴い、須恵器TK208型式が伴うとする。概ね該期併行の土器群とみているが、今後とも検討を続けたい。南信でも、該期併行期頃とみられる山下4段階に椀Aがみられるようである（山下1999）。

以上みたように、富沢4段階については、東信の資料以外では明瞭な事例を提示できていないが、漆町13群新相併行ととらえておきたい。次に後続の土器群と比較する中で、該期について今一度検討したい。

花岡Ⅳ期の標識資料である飯田市・天伯B2住（長野県教委1979）では、型式観から漆町14群併行とできる椀Aがみられる（図9-4）。供伴須恵器はTK23形式とする（佐藤1987、原1989）。当該資料は、黒色土器、須恵器写しの杯形式を含んでおり、花岡Ⅳ期の指標を満たすことができ、前田H-60とは須恵器の時間軸でも矛盾しない。天伯B2住と共通の様相は、千野が4段階とする本村東沖30・37住（長野市教委1993）にもみられる。椀Aは型式観で漆町14群併行とでき、30号住には須恵器写しの杯形式、37住には黒色土器が伴う。そして30住にはTK208～TK23型式の須恵器が供伴する。

以上の事例は、椀Aの型式観で富沢4段階とは後出とでき、供伴須恵器の年代観でも矛盾しない。

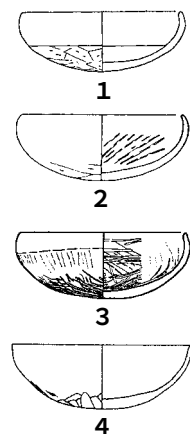


図9 椀A(S=1/6)
1:永町ガマノマガリ11号土壇 2:前田H60号住 3:国分寺周辺339住 4:天伯B2号住

北信でも、遅くとも TK23型式の段階には、椀 A は椀組成の主体をなす形式とはできないまでも確実にみられるとできる。椀 A の出現が遅れるのか、管見の範囲故、該当事例をみいだせずにいるのか、今後とも検索を続けたい。

繰り返しになるが、前田 H-60では花岡Ⅳ期の指標を満たしておらず、様相および椀の型式観から漆町13群の新相併行とできる。対して、天伯 B 2 住等は花岡Ⅳ期の指標を備えており、椀の型式観からも漆町14群併行としたい。富沢 4 段階、前田 H-60段階を漆町13群新相併行として、ここでは整理しておく。ただし、様式区分としての該期の扱いについては、以下の「併行関係と課題」の項で、その問題点や検討の方向等、整理したい。

一方、須恵器の年代観では、天伯 B 2 住、本村東沖30・37住等と TK23型式の須恵器が供伴しており、他に花岡がⅣ期とする牟礼バイパス B14住でも、須恵器写しの杯が伴い、TK208～TK23型式の須恵器と供伴している（長野市教委1986）。該期を漆町14群併行とみた場合、漆町14群を TK47型式併行とした漆町編年とは僅かであってもズレる。該期での須恵器にみる年代観の扱いは、土師器の時間軸を整理した上で援用する必要があると考えるが、前田 H60→天伯 B 2 住等の土師器にみる推移は時間軸を反映しているとみることができ、TK23型式の段階には、花岡が指摘するⅣ期の様式的特徴が成立していたとするのが、現状での理解となる。

漆町編年での漆町13群から14群への転換が TK23型式の内にあつたとすれば、そのズレは微妙ともできようが、1 型式のズレにはこだわりたい。そして、古墳編年⁽¹⁶⁾では TK23型式を 8 期のはじまり（広瀬1991）としていることも係わり、厳密な検討が必要となる。資料の豊富な信濃の状況、今後進める関東・東北での様相をみていく中で、先での椀 A の在り方も含め検討を続けたい。

千野 4 段階・富沢 5 段階以降 該期は漆町14群以降と併行するとしたい。花岡編年Ⅳ期等が該当する。様式的特徴等々については、すでに触れたので省略する。

Ⅱ 併行関係と課題

表 4 は信濃での編年と漆町編年、そして筆者の理解による新潟シンボ編年を対照したものである。併行関係の前半は青木編年、後半は千野・富沢編年によった。その為、青木 6 期の終わりと千野 2 段階のはじまりは整合しない。このあたりを含め、微妙な併行関係については、表 4 では表現できていない。本文を参照いただきたい。

1 北信濃での北陸系土器について

北信濃を中心とする地域には、定量の北陸系の形式がみられる。漆町 2 群（法仏期）から漆町 8 群併行期頃にとくに多いが、当然その前後の時期にもみられる。土器移動を考えるには、移動した形式の出自ないし波及元の特定が基礎作業となる。そしてこのことは編年研究にとっても不可欠な基礎作業であり、同時に、土器群の評価や様式区分に資する部分も多いとみている。多分に印象の域をでないが、あえて現状での理解を示しておきたい。検討にあたっては、北陸を越後、越中、能登、加賀等の北陸南西部の 4 地域に区分し、信濃での北陸系形式の波及元を推測してみる。当然、さらなる地域細分が必要であるが、今は用意できていない。

信濃での北陸系形式については、北陸北東部系土器の移動（坂井1984）、越後系の波及（宇賀神1988）、北陸系の系譜は境を接する越後に限定して考える必要がないかもしれないとの指摘（前島1993）、本源地を能登に求め、越後系とする理解（川村1996ほか）、古い段階は月影式に含めても良いような甕

がみられ、その後、越後系へと変化するとの時間的推移の指摘(岩崎1996)等々がみられる。また、信濃系土器の北陸への移動も指摘されている(桐原1980)。信濃と北陸との土器移動に関する研究は多い。研究史については川村が詳しく論じている(川村1996)。そして笹沢は、早くに、「富山湾地方の月影式土器が搬入されていた」(笹沢1988)と指摘している。越中からの土器移動は、信濃の北陸系土器を理解するポイントと考えている。今日の課題と考えていた筆者には、今更ながらであるが、先学研究をみた思いである。

1) 北陸北東部系土器の移動

漆町2群併行期 青木3期・4段階。該期には定量の北陸系形式がみられるようになる。北陸系土器の増加は、該期での遺跡の増加も一因であろうが、増加傾向は確実にみてとれる。波及形式の特徴は、甕では有段無文系の形式が定量を占め、擬凹線文系も含め口縁部を伸張化した型式は目立たない。内面はハケ調整を施す型式が多い。また、高杯・器台等も、口縁部の伸張化傾向がみられないか、緩やかとできる。これら特徴は、すでに多くの指摘にみられるように、北陸北東部の型的特徴とできる。

高杯・器台の漆町2-2群併行期での伸張化傾向は現状の予測的理解であるが、能登では確認できるし、越中でも多少緩やかとしてもみられる。そして越後では伸張した型式は少ないとされる⁽¹⁷⁾。対して信濃では伸張した典型的な型式は現状で確認できていない。また北陸南西部での「法仏型」とできる擬凹線文甕も確認できていない。これらのことを敷衍できるならば状況的根拠ではあるが、信濃での該期北陸系形式は越後からの波及が主体で、近接地域間交流によるものであった蓋然性が高いと予測できる。

該期でも新相、漆町2-2群併行期には広域での移動を示唆する形式がみられる。本村東沖110号住の甕がその一つとできる(図1-8)。当該形式の出自は分からないが、先で触れたように北陸はもとより東山陰までは確認できる。また、根塚の小型高杯も能登・宿東山6住の型式と類似する(図1-10)る。小型高杯については越中、越後でも類例がみられることから直ちに能登との交流を考えるわけではないが、次の漆町3群併行期には、越中との交流が明確に確認できるようになることを踏

表4 編年対照表

新潟 シンボ編年	北信編年		漆町編年
1期	1期	1段階	Ⅴ－1 ～Ⅴ－3
	2期	2段階	
		3段階	
2期	3期	4段階	漆町2群
3期		5段階	漆町3群
4期		6段階	漆町4群
5・6期			漆町5群 漆町6群
7期	漆町7群		
8期	5期	様相1	漆町8群
		様相2	
9期		様相3	漆町9群
10期	6期	様相4	漆町10群
		様相5	
	千野2段階		漆町11群
	富沢2段階		漆町12群
	富沢3段階		漆町13群 (古)
	千野3段階		
	富沢4段階		漆町13群 (新)
	千野4段階 富沢5段階		漆町14群

1期～6期は青木編年(青木1998a)

まえ、体勢として、より遠隔地間での交流の一端を示すものと評価しておきたい。

なお、本村東沖17・37号住等でみられる口縁部を短く作る有段擬凹線文の甕型式は(長野市1993)、越後でも多い。当該、口縁部を伸張化しない型式については、北陸南西部あたりからのからの影響力が弱かったことの反映としてのみではなく、丹後あたりの型式の特徴との関連で検討する必要があるとみている。有段無文系も同様の評価が必要とみている。くだんの信濃の型式を、即、丹後との交流とはみないが、越後では丹後あたりからの直接的影響がみられるとしたい。その点で、該期での土器移動をもつばら越後に求めたが、広域間での交流がなかったとするものではない。

漆町3群併行期 青木3期・5段階あたり。越中からの土器移動が明確に確認できるようになり、信濃との土器移動での大きな変化とできる。越中でも中・東部地域、婦負を中心とした地域あたりを想定している。具体例を2点あげておく。一つは栗林24・29号住にみられる口縁部を伸張し内面端部に肥厚帯を巡らす高杯である(図1-16)。能登あるいは越後みられないとはできないが、越中に顕在する。もう一つは七瀬の大型台付壺(図10-4)で、ほぼ同型式、同時期とできる資料が(図10-3)、越中・富崎3号墓で出土している(婦中町教委2002)。時間軸を限らなければ越中で他に3例、能登で1例を確認している。この形式の出自は保留するが特異な形態をもつだけに、信濃と越中での共有を大きく評価したい。該期には越後との土器移動も継続していたとできる。

漆町4～6群併行期 青木3期6段階あたりから4期(御屋敷式)。該期も越中の形式が目立つとできる。越中の中でも中・東部地域は、北陸北東部に属するが定量の月影系形式がみられ、北陸南西部での月影形式衰退後もそれら形式を継続させる。

越中・中・東部地域の月影甕には、口縁部端を細く尖らせるようにつくる一群がみられる(図10-1)。そして、鶴前SB04等に類似型式がみられる(図10-2)。口縁部端を細くつくる型式は、月影甕の新相期、型式規範が弛緩した段階にはしばしば認められるが、鶴前SB04は倒卵形のプロポーションをもち、弛緩期の型式とはできない。越中・中・東部地域での月影甕の口縁部のつくりと酷似しているとみる。同じく鶴前SB04等の盤状高杯も(図1-22)越中に集中的にみられる形式である。水内坐一元神社7土坑(長野市1997)等々、北信地域はもとより中信・東信地域でも散見できる。鶴前SB10の小型月影甕も(図2-8)、北陸南西部にない型式とはできないが、丸底化するまでに退化した特徴は、該期まで月影系形式を維持し続けた中・東部地域での月影系形式とみたい。

ここでは、越中、中でも中・東部と推定される形式を抽出、検討したが、当然、越後と推定される形式も

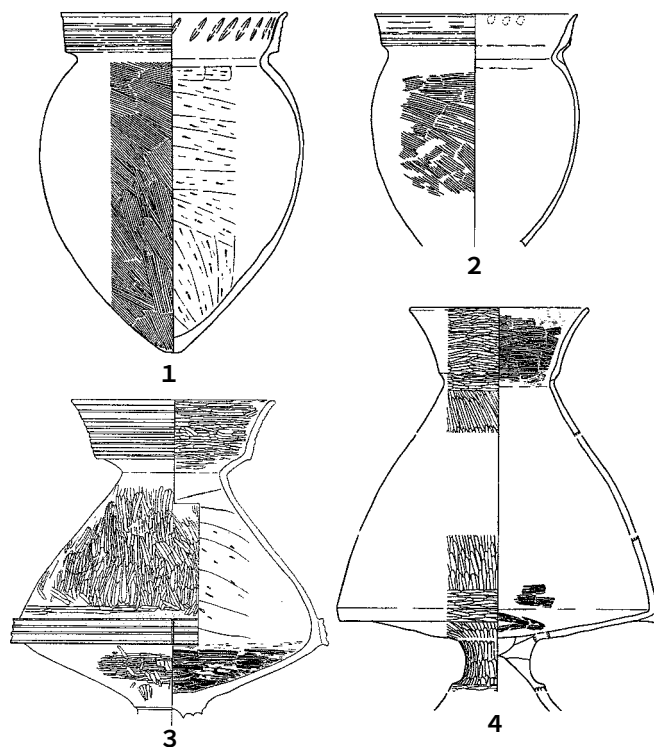


図10 越中と信濃の類似型式 (S=1/6)
1: 越中 HS-04 SD168 2: 信濃鶴前 SB04 3: 越中富崎3号墓 4: 信濃七瀬

多い。信濃で定量みられる変容した月影系形式は（鉢形の杯部をもつ高杯、有段小型壺等々）、越中から越後にかけての様相と対応しているとおきたい。

また、該期には北陸北東部系形式の移動範囲が大きく拡大する。信濃・上野経由での関東域への移動では、漆町2群ないし3群併行期頃までは塩尻市・上木戸の事例が（県埋文1988）南限であったとできようが、漆町5群併行期には確実に上総に及ぶ。

漆町7・8群併行期以降 漆町7・8群併行期にも定量の北陸系形式の土器移動がみられる。先項では漆町8群を下限とする小島境6号住の事例を示した。また、再三引用しているが、青木は甕での北陸系形式の移動について、青木5期・様相1までは多くの事例がみられるが青木5期・様相2以降影をひそめるとする。青木が標識としている資料を中心に管見の範囲で概観したが、青木様相1の篠ノ井SD9023・SD7014・SD7030では可能性のある型式がみられるが、様相2以降の資料では確認できなかった。様相1まで、ないしは様相2を下限とするあたりまでは確実に北陸北東部系土器が、固有の型式的特徴を維持して移動していたとできよう。そして、固有の型式的特徴を維持していることで、該期以降の土器移動とは区別して評価する必要があるだろう。越中からの土器移動も継続していると考えているが、先述の鶴前SB10の小型月影甕を除くならば、越後系であるのか、越中等の北陸北東部の型式であるのかの識別は難しい。滝沢が試みているような、「くの字」口縁甕の詳細な形式・型式分類を踏まえて検討を進めたい（滝沢2005b）。

漆町8群併行期以降の北陸北東部系甕は、口縁端を丸く収めるタイプに収束することから他地域の形式との区別が難しいが、信濃では社軍神等の玉作遺跡がみられる（丸子町誌1992）。緑色凝灰岩製石製品を製作していることから存続期間に様相3あたりを確実に含むとみている。玉生産技術を介しての交流から（駒見・桜井2004）、北陸系土器の移動は、移動の質的变化を問わなければ、様相2以降にもみられたとできよう。

他に該期の北陸系形式の移動、影響を示す資料に図11の甕がある。口縁端面に1～2条程度の沈線をめくらすことを指標に抽出した甕形式である。この指標は甕形式での一属性であるが、沈線をめくらす手法の出自は北陸系と考えられ、とくに越後では系譜で新しくみても漆町4群併行期までは確実にさかのぼることができる。北陸北東部系甕形式の手法が東日本域での甕形式に取り入れられたとみ⁽¹⁸⁾たい。

信濃では、図11-3の飯山市・柳町SI23（飯山市1996）、長野市・四ツ屋SZ1（長野市1996）ほか、新しい事例として様相3ないし様相3の古とみる図11-4・5の四ツ屋SB4等があり、後述する「千葉形五領甕」系の甕形式と融合したものもみられる。北陸と信濃との土器移動（交流）が継続していたことを示す事例としたい。

該期以降も土器移動は継続する。漆町13群併行期の土器移動については53ページに触れた。

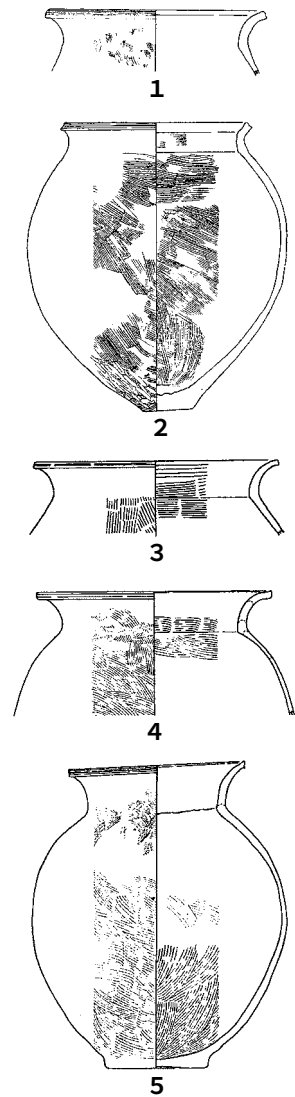


図11 沈線をもつ甕 (S=1/6)
1・2：釜蓋 3：柳町SI23 4・5：四ツ屋SB4

3) 北陸南西部系土器の移動

北陸南西部系の形式とできる土器は、漆町4群から5群併行期あたりに該当資料があるとみているが、特定できる事例は希である。漆町3群以前での確定できる例は確認していない。また、漆町7群以降では北陸南西部の固有形式が衰退することから、型式の特徴からは特定できない。

確実に北陸南西部系の土器とできるのは、松本市・向畑66号住の装飾器台(図11-1)である(松本市教委1990)。花岡は当該資料をI期後半の標識としているが、装飾器台は漆町5群を下限とできる。他には、北陸南西部系と確定できるものではないが、七瀬(長野埋文1994)の、漆町5群頃の月影甕(図12-2)。石川条里(長野市教委1994)の、漆町4群下限の大型複合口縁壺(図12-3)、同じく石川条里の漆町5群を下限とする鉢形の杯部をもつ比較的大型の高杯(図12-3)。水内坐一元神社1B号溝(長野市1998)の台付鉢(図12-4)。同じく水内坐一元神社14住(長野市1997)の鉢(図12-4)等を候補としてあげておく。

筆者の北陸南西部系と北東部系の型式識別は不十分である。その点で識別できていない資料も少なくないと考えているが、青木3期(5・6段階)から青木4期での越中の形式の顕在状況と比較し、少ないのは確実とできよう。現状の信濃の状況からは、北陸南西部系土器の移動を整理するには至らないが、漆町5群を下限とした型式がみられ、対して3群以前、漆町6群以降の明確な資料は確認できないと予測しておく。ただし、このことは、越後での北陸南西部系の土器の在り方を敷衍した間接的な予測である。越後の状況を要約し、越中の状況を援用することで補足しておく。

越後では漆町3群併行以降の有段擬凹線文甕が、30遺跡で約150点みられる(滝沢2009)。しかし、北陸南西部系の月影甕とできる型式はきわめて限られる。上越市、釜蓋1号環濠(SD7-1)上層等では、北陸南西部系の型式とできる漆町4群の月影甕がみられ、漆町5群あたりを下限とする型式からなる(上越市教委2008)。阿賀北の新潟市・葛塚(滝沢2005c)、笹神村・腰廻(笹神村教委2002)でも定量の有段擬凹線文甕がみられる。包含層資料が主体で時期の特定は難しいが、中心は漆町5群併行あたりにあるとでき、葛塚は北陸南西部系の型式、腰廻は南西部系の型式を含むとできる。他では、滝沢の集成によるが、上越市・八反田(新潟県埋文2002)、新潟市・棕(滝沢・野田2005)等の資料も該当しようが、まとまった事例は確認できていない。有段擬凹線文甕以外の形式は検索できていないが、多いとは予測できない。そして、漆町3群併行期以前には、越後でも北陸南西部系の形式はみられないようである。

頸城と阿賀北の在り方を同列に扱えるかは保留するとして、上越・釜蓋にみる漆町4群での波及と漆町5群の中でみられなくなる状況は、釜蓋が上越での中核遺跡であることも踏まえ、唯一の事例であっても注目したい。そして、上越・細田では(新潟県埋文2005)漆町5群から6群を主体とする有段擬凹線文甕12個体がみられるが、明らかに北陸南西部系とできる型式はみられない。頸城地域で漆

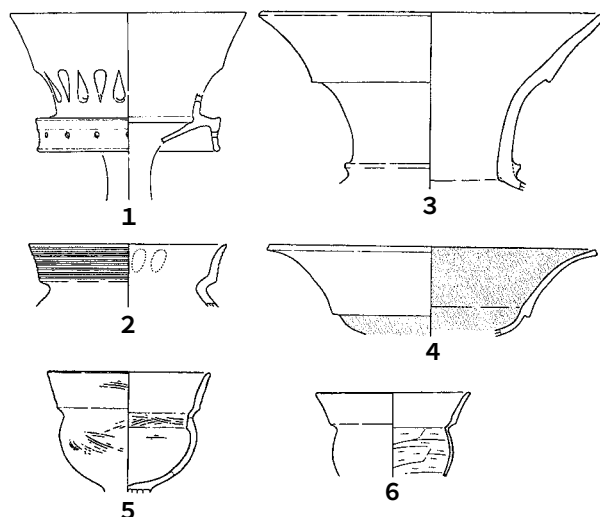


図12 北陸南西部系の可能性をもつ型式(S=1/6)
1:向畑66号住 2:七瀬 3:石川条里SB24 4:石川条里SB2 5:水内坐一元神社1・B号溝 6:水内坐一元神社14号住

町5群併行期の中で北陸南西部系形式がみられなくなることの傍証としたい。また、越中では漆町3群併行期にも有段擬凹線文甕はみられるが、北陸南西部の形式の影響を受けたとできる月影甕類似の型式がみられるようになるのは漆町4群頃の動きとみている。

漆町4群から漆町5群にかけての段階に、北陸南西部の土器が北陸北東部に移動、影響を与えたのは確かとでき、その動きは漆町5群併行期の中で、何らかの事情によって中断したと想定している⁽²⁰⁾。あくまでも作業仮説であるが、釜蓋でみた漆町5群の中での北陸南西部形式の衰退は、北陸南西部形式の伊勢を経由して上総にいたる太平洋ルート⁽²¹⁾の漆町5群期以降の盛行と連動しているとみている。信濃での北陸南西部形式にあえて注目した理由の一つはここにある。

北陸系土器の移動は、信濃ないし越後から上野を経由し上総にいたるルートが確認できている。川村の一連の成果では(川村1994、1996、1999)、北陸北東部の形式が主体であることは明らかであるが、このルートでの北陸南西部の形式の存否と時間軸を一層厳密に識別していくことが必要となった。現状では、漆町4・5群の北陸南西部形式が北信・中信地域まではみられるとしておく。

また、信濃で漆町3群以前の事例がみられないことを前提とできるなら、該期での新たな動きとできる。従前までの北陸北東部からの土器移動とは区別して評価する必要があるだろう。該期は広域での土器移動がはじまる段階にあたっている。広域間(遠隔地間)での土器移動は該期以前にもみられるが、該期には、北陸南西部系土器が畿内へ定量的に移動する。このことをもって、該期以前の広域土器移動と区別したい。北陸南西部土器の信濃への移動も一連の動きとして位置づける必要があるだろう。当然、信濃での様式区分での検討すべき要件となる。

北陸系土器の移動は、漆町2群併行期に本格化する。本稿での第1の画期とみる。該期は越後からの土器移動が主体とみた。ただ、越後での丹後等の影響を指摘したように、該期に遠隔地間の交流がなかったとするものではない。今後とも検討をすすめたい。漆町3群併行期には越中なかでも中・東部地域が、信濃との土器移動に大きく係わったとみた。第2の画期とみたい。越中からの土器移動は漆町7群併行期頃までは確実に続くとみた。本稿ではとくに扱わなかったが、信濃系土器の北陸への移動も確実にみられる。そして、漆町4・5群併行期には北陸北東部に加え南西部の土器移動もみられるとし、土器移動での画期とらえる必要があるとした。実態不分明ながら第3の画期とみたい。漆町8群以降は、北陸系土器の型式的特徴が薄れていくことから確認が難しくなるが、土器移動は継続していたとした。畿内系とされる形式等も含め、北陸経由の型式が含まれている可能性を検討していくことが今後の作業となろう。漆町8群頃、予測を交えてより厳密に示すならば漆町9群併行期以降⁽²¹⁾の変化を第4の画期とみる。そして、漆町13群段階での形式の共有にも触れた(53ページ)。

信濃と北陸北東部とは、時期により多少の粗密はあろうが、一貫した土器移動にみる緊密な交流を介した一つの領域を形成していた、とみられる。注目したいのは、北陸北東部の土器様式と信濃の土器様式が大きく異なっていたにもかかわらず、継続的交流がみられたことである。土器様式からみた土器圏、地域圏とは異なる「地域圏」の存在を考える好例とみている。一方、北陸北東部と南西部とは、大きくは同一の土器様式圏に含まれる。しかし、信濃との土器移動(交流)では、大きな違いがみられた。そして、信濃と北陸北東部以上の交流が、北陸南西部と北東部との間にあったとの保障もない。

付言しておくが、加賀、白山市域、北陸南西部土器圏内にあたるが、近年の調査で北陸北東部系の形式が散見されるようになった(未報告)。土器移動と土器圏は、当然といえば当然であろうが「領域」的理解だけでは把握できなくなった。

2 吉田式と箱清水式

吉田式と箱清水式 青木は、V様式併行期の土器群を箱清水Ⅰ式とⅡ式とし、それぞれ3段階、合計6段階に細分した（青木1999）。そこでは、従前、吉田式としていた1期が、箱清水Ⅰ式1段階とされ、吉田式は解消した。従前の小様式理解とは、1段階はもとより2段階の評価で大きく変わり、3段階と4段階の評価も重点が3段階に移行することとなった（青木1998a）。

青木の新たな箱清水式の設定に対し、千野は、吉田式と箱清水式の様式比較の基礎的検討を踏まえての議論が必要とする。また、資料的蓄積が十分なされつつある現在、形式設定時に立ち戻り、あらためてその意義について議論する必要性が痛感されるともする（千野2001）。

青木は、箱清水式の最古段階にあたる2期・2段階について、中期的伝統が色濃く残存しているとしつつも、中期的な高杯から離脱する、後期型の甕が定型化し始める等々、該期での変化を指摘していた（青木1998a）。千野は、千野V-2段階を「吉田式期にみられる中期と後期の複合的な様相を一步脱した感が強い」とし、今後の良好な資料の出現に期待したいとしつつ、「箱清水式の最古段階として把握することも可能である」とする（千野1992）。さかのばれば青木和明は、箱清水形式での高杯C（青木1999）の成立を畿内V様式系高杯との関連で評価した（青木和明1984a）。箱清水式の細分に加え、箱清水式の成立とその背景に言及した重要な論考と考える。

吉田式から箱清水式への転換は、漆町編年でのV-1期からV-2期転換、先稿（その2）で検討した尾張での八王宮宮式から山中式への転換等々と連動した動きと予測している。そして、この転換には、広範囲での土器移動（拡散）が背景にあったとみている。青木和明の指摘は、まさにそのことと係わっていると考えている。また、青木一男も高杯C等に関して、瀬戸内地域の土器様式との関連が想定できるのではないか、としている（青木1997a）。漆町編年での様式区分をそのまま信濃に当てはめれば、V様式併行期を吉田式と箱清水式に区分するとともに、吉田式と箱清水式の間にもう一つの大別様式設定する立場をとっていることになるが、吉田式・箱清水式の形式に不案内で、さらには北陸系形式の供伴資料が希少で、時間軸での厳密な併行関係さえ確定できていない。越後では、現状では、青木2段階と併行するであろうV-2併行期の様相は明らかでなく、V-2期からの変化を確認できるのはV-3期併行期になってからのようである。越後での状況とも対比しつつ、この予測のもと今後とも検討を続けたい。

箱清水式 先項では、青木2期・3段階が漆町V-3期併行あたり、青木3期・4段階が漆町2群併行、5段階が漆町3群併行、6段階が漆町4群から5群にかけて併行するとした。そして、漆町2群が4段階と併行するのは確実とできるが、3段階との併行関係には含みをもたせた。

箱清水式形式の型式変化を理解できていないことから、直接に型式を対象とした様式推移の検討ができない。安直な方法ではあるが、要約された小様式の特徴、その推移を手がかりに検討を進めることとする。青木の論考から青木2段階以降について要約するなら次のように整理できようか（青木1999）。

- ・ 2段階は、中期的な高杯から離脱する。栗林の系譜を引く壺は当段階まで残存する。甕では口縁部の伸張化と文様充填志向が当段階の特徴といえる。
- ・ 3段階は、高杯Cが出現する。壺は栗林系壺が終焉。甕は口縁部の伸張化が定着し後期型甕Bとして定型化する。文様構成は定型化傾向を示す。
- ・ 4段階は、高杯Cが定着、壺は箱清水型壺として定着。形の定型化、文様の定型化が一段と進む。甕以外の赤彩志向が進み、赤彩しない壺、鉢、高杯が例外的存在となる。

- ・ 5段階は、高杯Cの盛行、脚部三角透かし孔の定着。4段階は高杯の大型化、対して5段階は盛行とする。そして、器種・文様の定型化がもっとも進み箱清水式として誰もが認識できる段階とする。赤い土器のクニの具体化される時期ともする。
- ・ 6段階は、御屋敷式で盛行する様相が出現・成立するとし、高杯の小型化が進み高杯Dが確実に確認できる、壺では三段形成の壺が出現、甕ではe手法が出現する等々とする。

乱暴であるが以上をさらに簡略化すれば、2段階が中期の要素を残し、箱清水的要素の定型化以前。3段階が中期的要素の終焉、箱清水式につながる形式、型式の出現と一部形式の定型化。4段階が箱清水式とできる型式・様相の確立・定型化。5段階がより一層の個性化と、箱清水様式の顕示、そして6段階が御屋敷式に続く諸要素の出現段階とできようか。このように要約できるならば、4段階が漆町2群（法仏式）の様相、5段階が漆町3群（月影式）の様相、6段階が漆町4群以降（白江式）の様相とかなりの部分で類似しているといえる。そして、2・3段階は漆町V-2期、V-3期あたりと類似しているようにも思われる。

＜青木3段階と4段階＞ しかし、この理解にあたっては、前提となる整理が必要である。もっとも大きな未整理部分は、箱清水様式の確立を青木3段階に求めれば良いのか4段階なのかが、はっきりしないことにある。青木1999の様式区分では3段階との理解になるが、「定型化」との表現は4段階に目立つ。そして3段階と4段階が共に箱清水Ⅱ式に包含されたことから、両段階は、継起した変化としての側面が評価されたようにもとれる。一方、青木1998aでは、3段階が2期、4段階が3期とされ、当該段階は大別様式で区分されていた。この評価の差は大きい。

北陸でのV-2期、V-3期と漆町2群（法仏式）との様式の区別は、山陰・丹後等の広域での形式を共有した合成的土器様式から、北陸型の形式からなる土器様式への転換を指標とした（田嶋2007）。確かに漆町2群の形式の系譜がV-2・3期の形式にあることから、漆町2群を連続した様式としてとらえられなくもない。現にV-3期を含めて法仏式とする理解もある。うがった見方とされようが、青木3段階と4段階の評価はこのあたりと係わっているとみたい。箱清水式については広域で形式を共有する形での土器様式としてではなく、地域固有の形式からなる土器様式として把握されていると考える。それは「赤い土器のクニ」との形容に示されていると考える。上記のことから青木4段階を画期と評価したいが、時間軸も含め検討を続けたい。ご教示をお願いしたい。

笹沢は吉田式での中部高地型櫛描文の分布について、関東域で類縁性の強い土器がみられるとし、横浜市受地台山遺跡例をあげる。そして該期の土器分布をV期後半の中部高地型櫛描文をもつ甕の分布域の先駆となるものとする（笹沢1996）。広域に類似型式が分布する様は、先で触れたV-2期、V-3期での広域で共有形式がみられる状況と似た動きとはできないであろうか。

＜青木5段階＞ 青木5段階が漆町3群（月影式）併行であることは動かない。そして、先での「赤い土器のクニの具体化される時期」との指摘は、様式的特徴においても良く一致しているといえる。ただし、変化の形は、北陸南西部では定型化・個性化を進める一方で新たな形式の参入と組成の転換を図る側面がみられるのとは異なり、信濃では、あくまでも従前の形式を継承し、それを完結・昇華させる方向での変化ととれる。該期で変化するのは一致しているが、変化の「型」で異なる。今後、関東・東北域での該期変化の類型化の作業を通して、信濃での変化を整理したい。

青木は、箱清水式での中部高地型櫛描文をもちいる土器様式圏について、畿内型櫛描文の座光寺原・中島式と対峙し、群馬県の樽式、埼玉県の岩鼻式、神奈川県朝光寺原式、諏訪から甲府にかけての家下・金ノ尾型の土器様相にみられるとする（青木2000）。小山岳夫は、長野県内での土器圏について、小山Ⅱ期、Ⅲ期古（筆者註 青木2・3段階頃）は、松本平南部、諏訪は座光寺・中島式等の影

響が強く、小山Ⅲ期新～Ⅳ期（筆者註 青木4・5段階頃）に箱清水土器圏に含まれ（小山2000）、箱清水土器圏が伸張するとする。また、それまで類似した推移を辿っていた箱清水式と樽式は、青木5段階には異なった動きをはじめようである。青木5段階は土器様式の一層の個性化とともに、土器圏の伸縮、領域の明確化も進むとできる。この動きも漆町3群（月影式）とあまりに類似する。

＜青木6段階＞ 青木6段階については、御屋敷式に継続・盛行する形式、型式の出現期とする。次の御屋敷式と関連させて検討する。

3 青木4期（御屋敷式）について

該期は古段階が漆町5・6群併行、新段階が漆町7群併行で漆町8群と一部であっても重複するとした。一方、御屋敷式の呼称については、笹沢、花岡、あるいは土屋等、中でも最近の論考では積極的に使用されていないとの印象をもった。その事情については分からない。ここでは、「青木4期（御屋敷式）について」としたが、笹沢等の古墳時代Ⅰ期を対象として検討することになる。

1）青木4期（御屋敷式）の成立をめぐる

「東海系土器の突然の出現に、御屋敷期のもつ重要な意義があるのではないかと考えている」（青木1997a）とするように、御屋敷式は東海系土器の移動が重要な指標となっている。他には小型器台等従来みられなかった形式が組成に加わる（笹沢1988ほか）、そして地域固有形式の変質・衰退が指標であるとする（笹沢1988ほか）。

先稿（その2）では、該期での土器変化の指標として、①広域での土器移動。②小型器台等共有形式の組成化。③土器移動や共有形式がみられる段階での地域形式・組成の成立・確立の動きをあげた。そして①～③は同時に進行するものではなく、そこには地域差があり地域の特徴が反映される、とした。この指標は信濃での該期のとらえ方と大枠で共通するとできるが、在来形式の変質・衰退、中でも衰退については、該期での様式変化をみる重要な指標であるのは確かとできるが、①～③が進行していく中での新たな変化とみており、成立の指標とはしていない。

まず、③の地元形式の変化についてみる。①の土器移動や②の共有形式がみられる段階での地元の形式や組成がどの時点で確立するかについてである。青木は3期・6段階で高杯の小型化、三段成形の壺5類の出現、甕ではe手法の出現をあげ、高杯Dの出現も該期とし、これら型式、手法は御屋敷期に継続・盛行するとする（青木1999）。③とした変化は青木が明確に指摘しているとおり青木6段階にあったとできる。森本は、高杯の小型化を白江式併行の動きとする（森本2006b）。

青木3期・6段階は、漆町4群に併行し漆町5群を含むとした。漆町4群も在来系形式の定型化と組成を変化させる。従来、白江式は漆町5群からとしていたが、このことも根拠に漆町4群からとした（田嶋2006）。

①の土器移動では、東海系土器は青木4期古段階の標識である御屋敷4住でS字甕B類古。七瀬16住では漆町5群ないしやや新しいとみた北陸系小型有段壺とS字甕A類、B類が供伴していた。東海系土器の移動は、漆町5群併行期にはみられた、とできる。一方、北陸南西部系の土器移動が漆町4群併行期にのぼる可能性について触れた。青木6段階である。北陸南西部系の形式は、東海系と比べても、北陸北東部系の形式と比べても希少で、与えた影響は過大に評価できないであろうが、漆町4群は北陸南西部系の土器が畿内へ移動をはじめた時期にあたる。従前の土器移動とは同列に扱えないと考えている。北陸南西部系の土器移動は、青木6段階の評価に係わってくるはずである。課題としたい。そして先稿（その2）で示したように、北陸南西部系土器の移動は東海系土器の移動に先行する。信濃のあり方はこのことと矛盾しない。また、北陸北東部系土器は該期以降、移動範囲を大

幅に伸張するが、伸張時期での北陸南西部系・東海系土器との厳密な時間軸での整理と、分布域の対照作業を進めていきたい。

②の共有形式の組成化では、顕在してみられる形式に小型器台、いわゆる東海系高杯等がある。小型器台は赤塩3段階、土屋が3段階とする七瀬16号住にみられる。当該竪穴の年代観は、くだんのとおりである。土屋は3段階について、「小型器台・小型高杯等は少ないが確実に存在する」とする(土屋1998)。小型器台等の供伴時期の目安とできる。そして青木6段階と併行するとした赤塩2段階新の事例にはみられない。同様に、赤塩2段階新に併行し北陸系形式の供伴事例が多い鶴前遺跡でも確認できていない。先でみたS字甕の波及と併行して出現するようである。ここで注目されるのが四ツ屋30号住出土の高杯Dである。中部高地型赤彩高杯とされるが(青木1998a)、東海系の影響を受けて成立した形式とはできないのか。⁽²⁶⁾四ツ屋30号住の資料は、先でも触れたとおり箱清水式とするか御屋敷式とするか議論のある資料である。わずかであっても、青木4期(御屋敷式)の主体よりは古いと認識されているとできる。供伴の北陸系小型有段壺は、漆町5群併行としたが、遑っても新しいとはできない型式である。ここでも保留部分を残したが、共有形式の組成化は漆町5群併行期には確実にみられた、としておく。

御屋敷期ないし御屋敷式に向けての③地元形式の変化は青木3期・6段階にみられた。②の共有形式の組成化は青木4期の古段階にはあったとできよう。①の土器移動も、確実な動きとしては青木4期の古段階の東海系の移動に象徴されとできる。大方の指摘のとおり東海系土器の波及は、信濃の土器群に多大な影響を与えたであろうことも確かとしたい。ただ、繰り返しになるが北陸南西部からの土器移動は、希少とはいえ青木6段階にはじまっていた可能性があり、②の共有形式でも高杯Dは東海系の明瞭な移動に僅かであっても先行する可能性が考えられた。そして③は青木6段階にみられた。これらの評価が今後の課題となる。

先稿(その2)では、該期での土器変化についてAタイプの変化かBタイプの変化かの(田嶋1995)検討が必要であるとした。信濃の箱清水式の組成には、北陸系形式を除けば器台を含まない。そして御屋敷期で小型器台等新たな器種が加わるとできる。そのことから、器種の転換を伴うBタイプの変化と理解することもできようが、筆者のAタイプ、Bタイプの変化は、器種・組成の違いのみで区別しているのではない。土器がもつ機能のレベルでの転換を考えた。語弊もあろうが分かりやすくいえば、信濃での器台を含まない土器祭式は、西日本域から東日本域に広がる該期「土器祭式」の一つで、器台の欠落は信濃での土器祭式の固有性と評価したいのである。祭式の「型」は異なっているが、該期「固有祭式」群の中での一類型とみる。祭式での器種の構成の違いはおうおうにみられる。布留式に収束する変化は、その中から東海なり吉備なりの要素が選択されたとみる。信濃での御屋敷式移行過程での変化はAタイプの変化と理解しておく。そして、信濃をAタイプでの変化領域に含める。

2) 笹沢古墳時代I期新段階

ここでは笹沢等のI期新段階についてみるが、青木5期・様相1～2期あたりも射程に検討する。笹沢等のI期新段階は、漆町7群を中心とし、一部であっても漆町8群と併行するとした。

該期はI期新段階とされていることから、古段階と共に大別様式と認識されているとできようが、笹沢は、I期古段階の評価は流動的であるとする(笹沢1988)。そして、文脈からはI期新段階から古墳時代(土師器)としているようにもとれる。少なくとも古段階と新段階を大別様式と扱うことを保留している、とできようか。

また笹沢は、該期の特徴について重要な指摘をしている（笹沢1988）。一つは、「外来系土器と在地の箱清水土器の占める割合は遺跡や遺構によっても異なる」とする点である。二つは、「各地域の土器やその影響を受けた土器からなるのもⅠ期後半の特徴である」とする点である。そしてⅡ期を「新たに畿内系の布留式土器の影響を強く受けた土器が登場する」とし、その違いを明確にする。上記のⅠ期古段階と新段階の様式的評価、ここでの二つの指摘を踏まえ、該期の様式的特徴を漆町編年での該期様式理解と対照しつつ検討する。

箱清水形式の弛緩 箱清水系形式の弛緩の中身について推測してみる。

高杯、中でも高杯Cは極端に減少するようである。該期では東信・中道SB03等（長門町教委1984）にみられるが、体勢として東海系および東海系類似の高杯Dに置換されたとできようか。高杯はあらためて述べるまでもなく、祭式での主要形式であり、しかも高杯Cは、箱清水様式を象徴する形式であったはずである。

箱清水式の壺は定量みられるようであるが、新たな形式の有段・複合口縁等の壺が該期には出現してくる。安源寺1号墳（中野市教委1999）、弘法山古墳（松本市教委1978）、高遠山古墳（中野市教委2000）等の墳墓・古墳。集落資料では七瀬17号住、次の段階とされているが篠ノ井SD7030、さらに新しく編年されているが五輪堂14住（更埴市1982）、等がある。弘法山古墳や安源寺古墳の例は、Ⅰ期古段階に遡上するとの理解もあろうが、古段階としても古い段階にはのぼらない。確かに、該期での有段・複合口縁壺は、北陸と比較しても決して多いとはいえない。このことは青木の「二重口縁壺Dは、様相1以前には数例しか確認されていない」との指摘（青木1998a）からも窺えるが、中・大型壺では、箱清水形式にこだわり別形式を受け入れなかったような印象さえもっている。その点で、それほど多くないとしても別形式の有段ないし複合口縁壺等を受け入れた意味は大きいとみたい。また、甕も箱清水形式を残すが、外来系甕と箱清水系の要素とを折衷した甕G1・「ハケ調整くの字甕」（青木1998a）が、確実に成立する。瀧の峰2号墳、四ツ屋9号住、牟礼バイパスA1号・A2号住、牛出古窯SB05等々、例示に事欠かない。そしてこの形式も該期新段階に以降に集中するとできる。甕G1は、その後において甕の中核形式となることはないが、甕においても新出形式が出現したとできる。

以上は資料の検索が不十分であり時間軸での整理も必要と考えているが、大枠、該期で急速に進む動きとして大過ないとみている。該期での箱清水系形式の弛緩傾向、外来系土器の頻度の評価に加え、高杯Cの欠落、壺組成の多様化、そして新出系「ハケ調整くの字甕」の盛行は、箱清水様式の構造的な解体の程度を示していると考ええる。北陸南西部では、該期併行の漆町7群で多少の地域差、遺跡差をはらみながらも地域形式がみられなくなる。北信では該期でも地域形式を温存・維持するとできるが、地域形式からなる様式構造は崩れていた、とできないであろうか。そして、地域形式については、その存否だけでなく、様式構造での比較が肝要と考える。該期をⅠ期として、大別様式に包括できるかの議論とも係わろう。

外来形式と在地の形式 先で触れたように、笹沢は該期の特徴として「外来系土器と在地の箱清水土器の占める割合は遺跡や遺構によっても異なる」とする。青木が様相1とした篠ノ井SD7030等は、箱清水土器の占める割合が少ないが、このことと係わっているのであろうか。

このことは、該期での外来形式の波及と在来形式の弛緩に伴う多様な組成、地域圏の変容を遺構・遺跡からみた指摘とできよう。遺跡や遺構単位で組成が異なる在り方は北陸南西部でもみられ、該期頃までの特徴とできる。北陸南西部の場合は地域形式が衰退しており、畿内系なり東海系なりの外来系形式の構成比の違いとして現れる。小地域単位、極端には河川を挟んでの土器組成の違いが確認さ

れている。地域形式弛緩の様態、多地域からの外来形式の波及と多様な受容スタイルは、遺跡単位、小地域単位、地域レベル、さらにはより広域レベルにおいてさえ多様であったとみている。その有様が大きく変化するの、畿内を枢軸として組成・形式が一体化、斉一化をはじめる漆町9群併行期以降とみている。笹沢の指摘を踏まえれば、漆町9群併行期での変化がより分かりやすくなる。

また笹沢は、該期を「各地域の土器やその影響を受けた土器からなる」とし、Ⅱ期とは「新たに畿内系の布留式土器の影響を強く受けた土器が登場する」ことで区別する。そして、該期には畿内、東海西部、越後の形式がみられるとする。花岡は、加えて関東系、近江系もみられるとする(花岡1996)。青木は、青木5期・様相1を「小型丸底壺E1、屈折鉢F、有段口縁鉢Gを含まない」段階とし、それら器種を含む様相2以降と区別する(青木1998a)。青木5期・様相1と笹沢のⅠ期新段階、さらには青木5期・様相2以降と笹沢Ⅱ期との様式評価は類似しているといえる。

もう少し続けるが、笹沢はⅡ期の外来系形式のあり方を上記のように要約する一方で、越後系の形式が多くみられる、ともする(笹沢1988)。先項ではその具体例として小島境6号住をあげた。小島境6号住では北陸系の他、東海系他の形式が目立つが、畿内系は少なくとも目立つとはできない。笹沢の「各地域の土器やその影響を受けた土器からなる」段階がいつまでかの厳密な時間軸は検討できていないが、小島境6号住例、青木の北陸系消長の指摘によるならば(青木1999)、笹沢等Ⅱ期を一部含み、青木の様相2を下限とする段階まで、漆町8群併行期あたりまでの様相であったといえる。

一方、該期には畿内系形式もみられる。鶴前SB37、牛出古窯SB05の布留甕はⅠ期新段階の資料とできよう。恒川1号溝、石行1号住等の古相の布留甕はⅡ期古段階とできようか。そして、安源寺H1等では叩き甕もみられる。該期での畿内系形式は、北陸南西部のように顕在しないが、少ないとはいえ該期での波及はⅠ期新段階の様式的特徴を検討する上で大いに注目したい。今後、Ⅰ期古段階での畿内系形式を検索して、該期との対比作業を進めたい。

東日本域固有形式の移動 東日本固有形式は、個々の形式の分布域を検討していくことで、東日本域での細かな地域間交流を検討できる。東日本での固有形式の中から、信濃にみられる固有形式の分布と土器移動について概観する。当然、北陸系土器も該当するが先で触れたので、ここでの具体的検討は省略する。なお、笹沢等Ⅰ期新段階から、青木の篠ノ井期の古段階を中心とした時期の土器移動は、畿内系形式の組成としての定量的波及に先行する動きとみる。

該期には多様な結合器台がみられるが、その中での図13-1を対象とする。滝沢のⅡ類にあたる(滝沢2005a)⁽²⁸⁾。その成立は、Ⅰ期古段階とも新段階ともできるが、新段階の漆町7群併行に出現していたのは確かとできる。下限は信濃では青木6期・様相4あたり、関東・東北域ではもう少し新しい段階までみられると予測している。分布は北陸北東部、関東、中部高地に集中的にみられ西は尾張、東は東北南部までは確実に分布し、稀とできるが畿内にもみられる。出自については、当該Ⅱ類が「北陸系」とされていることから(利根川1999ほか)、北陸、中でも事例が集中する越後と理解されているようでもあるが、越後から遠い東信で目立ち、逆に北信に少なく、越後・頸城でも多いとできないこと、そして北陸北東部系形式の分布域とかならずしも一致しないこと、北陸北東部形式衰退後も盛行していること等、系譜はともかくとしても、当該形式を主体的に動かした地域については、集中域と関連させ、いまだ検討の必要があると考えている。現状では上野、武蔵等の関東域、そして越後・阿賀北に濃密な分布域をみることができ、それら地域間を軸とした土器移動・交流があったとしたい。

甕では図13-2・3に注目したい。青木は、千葉形五領甕との関連を指摘する(青木1998a)。重要な指摘と考える。北陸系土器の移動を考えれば蓋然性の高い指摘とも思われる。そしてプロポーショ

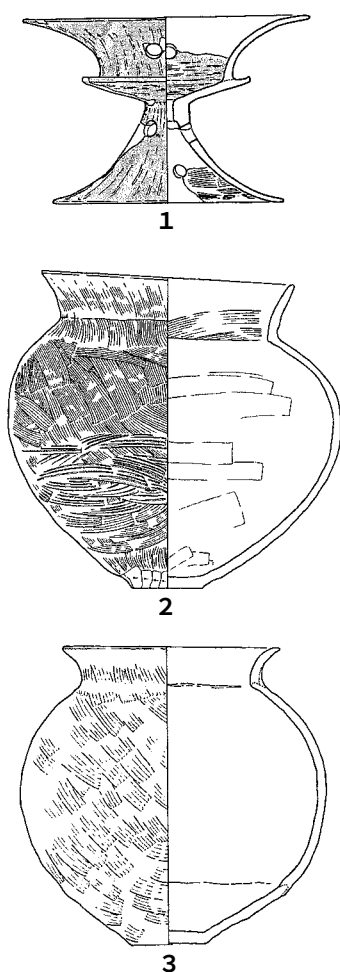


図13 東日本域固有形式 (S=1/6)
1: 埼玉・坂戸市中耕 2・3: 篠ノ井

ンで類似の型式は、南信から関東・東北域に広範にみられる。当該形式についても、独自の交流域、交流ルートを検討できる固有形式と考えている。

ただ、当該甕は青木5期・様相1にはみられるようであるが(青木1998a)、盛行は様相1よりも様相2以降にあるとできることや、当該甕を一つの系譜で理解して良いのか等も、単に勉強不足からであるが整理できていない。他に、甕G1も該期土器移動を考える有効な形式とみている。

整理できないままでの記述となったが、結合器台にみる上野・武蔵を中心とした関東域、越後、東信での分布。保留部分を残すが、千葉形五領甕にみる信濃はもとより関東・東北域での分布に触れた。先項では北陸北東部系形式の信濃、越後、会津そして上野を経由しての上総への波及と図11の甕にみる信濃、会津への波及等を指摘した。篠ノ井期前半、青木5期・様相2あたりまでは、東日本域での固有形式の分布にみられる独自の土器移動と交流が維持されていたとみたい。そして該期の土器移動は、原則、I期古段階での土器移動のあり方を継承していると予測している⁽²⁹⁾。これら土器移動に畿内系形式が全く関与しなかったとはできないし、列島レベルでの土器移動では畿内系形式が中心的役割を担っていたとできようが、少なくとも信濃での土器移動は、畿内系形式主導とはできないと考えている。畿内系形式の移動は、多地域形式の土器移動の一つであったとみたい。ここでは予測的理解に留めざるを得ないが、このこと具体化が次稿以降の課題となる。

漆町編年では、4群から8群までを大別様式として、漆町6群と7群の間に小画期を設けた。大別様式としたのは波及する形式が多地域に及び、畿内系に限定できないことを根拠とした。漆町7群での地域形式の衰退は大きな変化とできるが、このことを優先した。そして、漆町7群の成立を漆町4群の成立と比較しての相対的小画期とし、地域形式の衰退を指標とした。該期で布留祖形甕が波及するが、北陸南西部での顕著な特徴としてあわせて評価した。さらに、漆町4群から8群までは時期が下るに従い畿内系の影響が強くなるが、土器移動が畿内系に明確に収斂する動きを漆町9群以降とし、9群の成立に大別様式での画期をおいた。

箱清水様式の弛緩傾向は、I期古段階から徐々に進行したとするより、I期新段階で急激に進行したと予測した。信濃でのI期の様式区分と係わろう。

地域形式衰退の時期は信濃と北陸南西部では異なる。また、北陸北西部での布留祖形甕の波及にみるような顕著な畿内系形式の動きはみだせなかった。そのことから信濃と北陸南西部の状況は大きく異なるようにもみえるが、信濃においてもI期新段階には、僅かであっても畿内系形式がみられた。箱清水形式を温存・維持しているとはいえ、北陸南西部と共通した動きとして大いに注目したい。同時に、このことは漆町7群あたりの広域に及ぶ様式変化の背景をうかがわせる重要な動きとして注目している。

また、該期での遺跡・遺構単位での不安定な土器組成と東日本域での固有形式の動きに触れた。該期の動きを畿内系形式のみからではなく、東日本域での顕著な形式の出現とその動きから探るよう試みた。それが明確にみられる段階の一つがⅠ期新段階、漆町7群併行期と予測し、信濃でのⅠ期新段階から青木5期古段階の状況を、「各地域の土器やその影響を受けた土器からなる」（笹沢1988）段階とみた。加賀での漆町7群と8群併行期の様相と一致しているとしたい。この理解で良ければ、青木の篠ノ井期、笹沢等のⅡ期の様式区分と係わってくる。青木5期・様相1ないしは様相2あたりまでの様相は、次項での青木5段階・様相2ないし様相3以降の土器移動と対比する事で、より分かりやすく示せると考えている。

4 篠ノ井期

青木5期・様相2から青木6期を主たる検討の対象とする。青木が「小型丸底壺E1、屈折鉢F、有段口縁鉢Gを含まない」とした青木5期・様相1に続く段階にあたる。先では、青木5期・様相2・3が漆町8群から9群、青木6期が漆町10群と併行するとした。

畿内系形式の組成化 畿内系形式の中から屈折脚高杯、小型丸底壺、小型器台C、屈折鉢Fの波及（受容）の状況を、青木の分析によりながら（青木1998a）概観する。時間軸は、様相2→様相3→様相③→様相4・5とする。様相3と様相4の間に様相③（青木1997）を入れた根拠は先で触れた（49ページ）。

屈折脚高杯は、様相2ではみられず、様相3で初出。様相③で定量みられるようになるが、型式では、次項にみるように脚部中実タイプであったり杯部が独自の形状をもつものからなり、定型化した畿内系屈折脚高杯とはできない。定型化した型式は様相4には確実に出現、盛行する。そして該期での高杯組成は当該屈折脚高杯で占められる。付け加えるならば様相3には東海系とできる高杯が伴い、様相③には高杯Fが伴う。小型器台Cは、様相③からみられる。様相4以降、盛行するようである。小型丸底壺は、様相2の灰塚H1にみられる。青木はE2を含むとしているがE1との区別の難しい型式である。そして同じく様相2でのSB7508には、少なくとも畿内系とできる小型丸底壺は含まない。様相3で明確なE2が出現し以降みられるとできよう。屈折鉢Fは様相3にみられる。青木が様相2にさかのぼる可能性を指摘しているように（第183図）、様相3のSB7256より古相の型式が本村沖SB4にみられるが、様相2までのぼるとできるか微妙である。様相4・5では減少するようである。また、小型精製器種以外の形式にも変化がみられる。信濃ではさほど明瞭ではないが、壺では複合口縁壺が変わって有段口縁壺が盛行する。相対的であっても薄甕も成立する。これらも畿内系形式の波及に連動した変化の一つとみたい。

以上を要約すれば、様相3で小型器台Cを除く、屈折脚高杯、小型丸底壺E2、屈折鉢F、が出現し、様相③で小型器台Cが加わるとできる。ただし様相③までの屈折脚高杯については畿内系の形式とできるものではない。が、これら形式は様相4で斉一化する畿内系組成の構成形式とでき、様相3がその端緒にあたることとなる。確かに、小型丸底壺ではE1とするかE2とするか判断の難しい型式が様相2にみられたし、布留甕は遅くとも笹沢Ⅰ期新段階にはみられるなど、様相2以前にも畿内系の波及がみられるが、様相3での多形式に及ぶ「セット」での出現を畿内系形式の本格的波及と評価し画期とみたい。なお、以上の整理に基づけば、布留甕、そして保留部分を残すが小形丸底壺E1の波及は、屈折脚高杯等々の波及に先行してみられることになる。様相2以前が概ねその段階にあたることになる。

一方、様相③までは、定型化した畿内系の形式は決して多くなく、畿内系の形式を写した固有の型

式がその欠を補完する在り方をとる。屈折脚高杯でみたように畿内系以外の固有の型式で補完する。また、Ⅰ期以来の東海系高杯の併存や、Ⅰ期新段階以来の東日本域固有形式も伴う。様相3そして様相③は、時間軸はともかくとしても、漆町9群の様相と共通する。そして畿内系形式で斉一化する様相4とも、「セット」としての波及をみない様相2とも区別できる。

小形精製器種にみる地域固有形式 図14に示したのは、北信にみられる東日本域での固有形式である。信濃に限定しなければ、小形精製器種に限っても底部に凹みをもつ小形丸底壺等、顕著な形式がみられる。これら形式は青木5期・様相3、様相③頃に出現し、概ね青木6期新段階にはみられなくなる。そして推移では地域差があるとの予測でいる。

繰り返しとなるが、高杯では14-1・2等、青木様相3に出現。小型器台14-3は、青木様相2に祖型がみられるが盛行は青木様相3から様相③。小型丸底壺14-4は、一例しか確認していないが青木様相4。そして大型の小型丸底壺14-6は、青木様相4には成立していたとできる。小型精製器種の大型化は東日本域、そして信濃での顕著な特色とできる。また、鉢14-5は青木様相③にみられる。

以上にみたように、各形式の成立には厳密には多少の時間差がある。事例が少ないため、現状の資料から出現時期を新しくみた形式もある。しかし、その成立は決して五月雨的でなく、青木3期・様相3～様相③頃に集中してみられると予測している。しかも該期での固有形式はその全てでないとしても、祖型を畿内系形式に求められるものが目立つ。Ⅰ期新段階頃までの固有形式は、多地域の形式を写したり、東国での新たな形式を生みだす動きであったとみている。該期固有形式の畿内系形式を写すあり方は、畿内系形式の波及が、それ以前とは強く、質的に異なっていたことを雄弁に物語っていると考える。

畿内系形式による土器様式の斉一化は青木様相4とした。漆町10群併行とみた。対して、青木様相3ないし様相③には、畿内系形式を写した固有形式が「セット」として出現するとした。一方では畿内系の典型的形式はそれほど多くなく、高杯を例にⅠ期以来の形式、東日本域固有形式も併存するとした。ここでは例示しなかったがⅠ期以来の形式では、先項でとり上げた千葉形五領甕も該期まで盛行する。信濃では事例が少ないが伊勢型二重口縁壺の該期での盛行も特筆できる。該期を時間軸で漆町9群併行とできるかどうかはともかくとして、畿内系形式による斉一化に先行して、畿内系の形式をセットで受け入れつつも、それを写した固有形式群の盛行とⅠ期以来の形式・型式が伴う段階があったとできる。この様相をもった小様式の抽出と評価、そして時間軸での整理を進めたい。

該期での固有形式を以上のように評価できれば、これらの出現時期を特定していくことで、東日本域でみえづらかった畿内系形式の動きを把握できることになる。従前は、斉一化した畿内系形式を組成とする段階を大いに注目していたとできるが、それに先行する様相を評価する手だてとなる。

一方、東日本域内でも畿内系形式とこれら固有形式の在り様に地域差がみられる。北陸南西部との

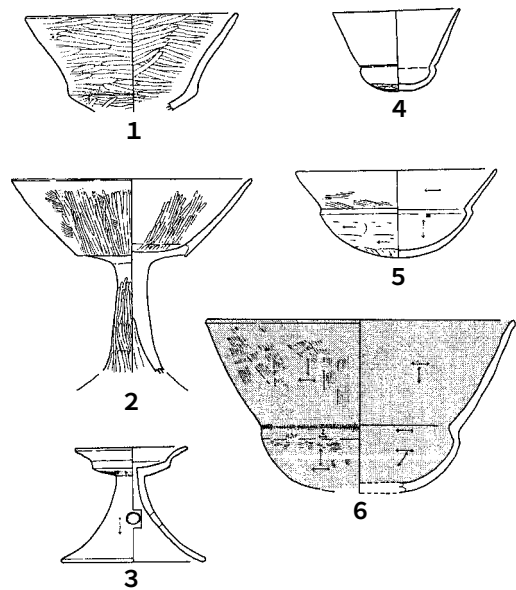


図14 地域固有形式 (S=1/6)

1:篠ノ井 SB7256 2:篠ノ井 SB7639 3:松原
4:石川条里 SK1046 5:石川条里 SD101 6:松原

対比のみ示すが、少なくともこれほどの特徴的な固有形式はみられないとできる。そして、漆町9群期には白江式あるいは漆町7群からの形式と定型化した畿内系屈折脚高杯や小型丸底壺が伴う⁽³²⁾。これら違いを評価していく必要がある。当該固有形式は、東日本域での畿内系形式の波及の様子と地域の固有性を検討する「キイ」となろう。そして、該期には東日本域での土器移動ルートも変化するとみているが、東日本域での固有形式は、そのことも踏まえた該期東日本域での動きと、より詳細な地域圏あり様を検討する、有効な素材ともなるように思える。これまた、今後の作業である。

5 漆町11群から漆町14群併行期

1) 画期区分

岩崎卓也は古墳時代土器を5段階に区分する(岩崎1996)。該期は第3期と第4期にあたる。第3期は4世紀末から5世紀中葉までをカバーするといって大過あるまいとし、「小型器台や小型高杯などが消え、ひとり粗雑な作りとなった小型丸底埴だけが盛行する時期ともいえるだろう」とする。第4期については、「5世紀末から6世紀に属し、須恵器の普及とともに、高杯・壺などが急激に減少を始める。しかし銘々器を構成する埴・皿の類は、ほとんど衰えることなく盛行する。内面処理したもの、ようやく増加をはじめ」等々とする(岩崎1996)。

岩崎は、5段階区分での具体的な標識資料を示していないため、第3期のはじまりについては千野2段階(漆町11群)か富沢2段階(漆町12群)かの判断はできないが、第4期を、千野4段階・富沢5段階以降、花岡Ⅳ期(漆町14群以降)あたりに求めているであろうことは、暦年代観、須恵器の普及等々の指摘から確実とみている。

岩崎は第3期を大別様式として、第4期(漆町14群併行期)の成立に画期を求める。この画期区分による編年は、先稿(その1)での畿内、(その2)での尾張では、少なくとも明確な事例を確認できなかった。今後進める、関東・東北域での土器編年での該期画期区分と、その様式内容も含めた論点・根拠等を注視していきたい、と考えている。

付け加えておく。該期「併行関係」の項でみたように、古墳時代中期を対象とする編年で、漆町10群併行期を1段階とし、該期からは始める編年がいくつかみられた(表3)。このことと関連するであろうことに、「中期における様々な新器種の導入に際し、屈折高杯の登場が最も早い変化の兆候として捉えられ、その消滅期は後期的土器様相が完成する時期と概ね一致する」(富沢他1999)との指摘がみられる。この指摘からは漆町10群併行期を古墳時代中期への移行期とみているようにとれる⁽³³⁾。故に、漆町10群併行期を古墳時代中期の編年に含めるのであろう。同様に、先では、白井Ⅱ期2～3段階の併行関係についての白井の理解を引用した(52ページ)。この併行関係の理解も上記と係わっているように思える。これら理解は、画期区分と係わるのはもとよりであるが、漆町11群および12群併行期の小様式の抽出とその評価を曖昧にしていると考ええる。

2) 個別形式の整理

<甕> 直井は、富沢2段階に「底部をケズリで丸くした甕A、甕Bが確実に出現している」とする。また千野も、丸底の甕B1が千野2段階に存在する可能性があるとする。漆町12群ないし漆町11群併行期で甕形式にも変化がみられるとするのである。北陸南西部、北加賀では漆町11群に布留甕から「くの字」甕への転換をはじめていた可能性があり、南加賀では漆町12群に同様の変化がみられるとした(田嶋2008)。畿内でも該期に「くの字」甕への転換をはじめめる。信濃の甕は、改めて述べるまでもなく布留甕ではない。しかし、信濃での丸底化は連動した動きとみるのが、自然な理解と考

える。該期での変化を評価していく上で、きわめて重要な指摘とみている。時期の特定が課題である。ご教示をお願いしたい。

＜粗製小型壺＞ 千野 2 段階（漆町11群併行期）から千野 3 段階（漆町13群古相併行期）までみられた。そして、富沢 4 段階（漆町13群新相併行期）に、北信では千野編年 3 段階と 4 段階の間に急激に確認できなくなるとできた。僅かに、千野 4 段階とできるであろう榎田 I 期（新）の榎田 SB361 に 1 点みられるが（長野県埋文1999）、急激な衰退は確かとできる。ここでの趣旨に即して具体的に示せば、前田 H-60、富沢 4 段階の標識資料、そして千野 4 段階の竪穴資料にみたように、椀 A とは供伴しない傾向がみてとれた。加賀でも椀 A の段階には原則衰退している。

＜椀 A＞ 以上を踏まえてのことであるが、椀 A は、漆町13群から14群への移行、漆町14群の画期を検討する上で、「キイ」となる形式と考えている。先で、加賀での型式観を信濃に適用できたように、型式的に酷似し、変化が類似していることと、きわめて広域にわたる分布域をもつことで注目⁽³⁴⁾している。

須恵器の年代観では、前田 H-60には TK208型式、千野 4 段階の本村沖30住他の資料には TK23型式が伴うとした。管見の範囲であるが、信濃では TK208型式の段階には出現していたとできる。加賀では TK208型式頃⁽³⁵⁾。先稿で検討した畿内では辻編年 4 段階（ON46～TK208）には確実にみられ（辻2002）、尾張では宇田 I 式 2 段階（TK216～ON46）とする（早野2001）。今まで検討した地域に限れば、信濃も含め TK208型式頃に出現・波及の時期を求めることができる。そして、TK208型式は、須恵器生産が陶邑の地に固定した最初の段階（田辺1966）、日本的様式を確立した画期として理解・評価されている点も椀 A の評価との関連で留意したい。他の東日本域での検証作業はできていないが、先での型式の類似と広域分布に加え、出現・波及の時期も限定できる可能性の高い、注目すべき形式との予測でいる。

＜黒色処理＞ 丁寧なヘラミガキを伴わないものが直井・島田 2 段階（漆町12群）にはみられ、その様相は直井・島田 3 段階（漆町13群古相）にもみられるとする（直井1999）。類似の事例は漆町13群古相併行とした富山市・境野新 1 号竪穴資料（図 8-1～6）にもみられることから、該期に黒色化する技法が用いられたのは確実にできる。ただ、このタイプは量的に希であることもあり、所謂「黒色土器」への系譜・推移は明らかにできていないようであるが、何らかの評価を用意する必要がある。

「黒色土器」は TK23型式にはみられるとできよう（千野1993、花岡1991）。原は TK208型式に遡上する可能性をにじませつつ TK23型式には確実に出現するとする（原1989）。さらに山下は、山下 3 段階（富沢・千野 3 段階）に出現の可能性を指摘している（山下1999）。信濃では、TK208型式にのぼる具体的事例を知らないが、TK23型式の事例は確実にみられる。ご教示をお願いしたい。そして定着・普及期については、TK23型式を含む千野 5 段階（千野1993b）、TK47型式とする花岡Ⅳ期（花岡1991）、TK47型式以降とする理解（原1989）等がある。TK47型式には定着・普及をはじめていたとできようか。

黒色処理の評価については、もはやみられないであろうが、極端には須恵器の不足を土師器で補うための技法で、須恵器写しの器形をもち黒色処理を施した椀（杯）形式等は、須恵器への憧憬の象徴とされたこともあった。筆者はこの理解には否定的であったし（田嶋1989）、土器が常用の食器なのかさえ検討が必要と考えている（田嶋1987a、1996）。土器が常用の食器で、食器として須恵器が不可欠であつたら、東国でも大いに生産されたはずである。須恵器が土師器より格上の食器であったのなら、平城京等の宮都での土師器の多用は説明がつかない。同時に黒色処理は、該期にはじまった技法ではない。

しかし、黒色処理の普及・盛行は、列島レベルでみれば須恵器の普及に対応しているようにみえるのも確かである。黒色処理の評価は、当然のこととして漆町14群の理解と係わってくる。黒色処理の分布と時間軸、そして該期土器様式のなかでの在り方を整理していく中で検討を進めたい。

3) 漆町14群への推移と画期

花岡がTK47型式を中心とする時期をⅣ期とし、それまでのⅢ期と区別している。期の区分は画期に相当するとできよう。そしてⅣ期の特徴を的確に要約しており、その様相は漆町14群に共通するとできる。しかし、Ⅳ期の様相が確立する段階での供伴須恵器はTK23型式とでき、漆町編年とは年代観でズレができた。

富沢は該期区分に関し、「1段階は古墳時代前期に6段階は古墳時代後期にそれぞれ含めるべきと考える。よって2段階～5段階を古墳時代中期とし、微細に見ると中期でも3段階と4段階の間に土器組成変化の大きな画期を設定できると思われる」とする(富沢1999)。富沢4段階は、再三触れている漆町13群新相併行とした段階である。該期に大きな変化があるとする理解は、直井・島田(直井・島田1999)、山下(山下1999)も、中信・南信地域の土器動態を踏まえ指摘している。富沢の6段階を古墳時代後期とし、4段階を中期の中での画期とする理解と、花岡のⅣ期に画期を求める理解とは同一にできないであろうが、富沢の理解は、信濃での大方の見解のようにもとれる。

富沢3段階、より子細には千野3段階までは、椀Aがみられないようであり、対して粗製小型壺が組成としてみられた。粗製小型壺は漆町11群以降の土器様式を象徴する形式である。そして富沢4段階、椀Aが出現する段階には消滅する。この変化は、信濃では明快に推移しているように思われた。そのことから富沢等の指摘には説得力がある。

能登では、杯部に凸帯をもつ高杯等々、漆町13群併行の型式的特徴をもつと思われるにも係わらず椀を組成に含まない、ないしは目立たない土器群がみられる。先稿(その2)で触れたように、尾張でも椀類は顕在しない地域とのことであったが、志賀公園遺跡例にみる限り、椀Aに先行する椀類はみられない。あくまでも作業仮説の段階であることをお断りしておくが、能登等の事例を明確に検証できたならば、富沢3段階までの椀形式は、必ずしも該期組成に必須の形式でなかったことになる。対して椀Aは、広域に展開することで、以前の椀とは評価で区別する必要がでてくる。当然、当該椀Aの出現は、様式区分と係わることになる。ここでは、該期での画期区分は保留するが、大きな宿題として、供伴須恵器の年代観も含め、今後の関東・東北域での検討を続けていきたい。

註

註1 本稿の趣旨からずれるが、どうしても申し添えたい。本稿での作業は、あらためて述べるまでもないが、漆町編年の正当性を主張するためのものではない。漆町編年と他地域編年とを対照し、その有効性と限界を検証しようとするものでもない。しかし、各地域での編年を消化できないまま、漆町編年のみを振りかざしての議論を展開しているようにも思う。他地域編年で学ぶことはあまりに多いが、現状ではそのことの評価もできていないように思う。そして意見の相違のみを強調して稿を進めているのではないかと、とも思っている。ご寛恕と一層のご指導をお願いしたい。

註2 新潟シンボ編年2期と法仏式の併行関係に関しては、漆町編年のⅤ-3期との関連があいまいなようにもとれる。確かにⅤ-3期も含め法仏式とする理解があり、筆者も新潟シンボ時は、その時期幅を明確には示していなかった。現在は漆町2群に特定している。そのことでの時間軸の整理が必要である。

森本の成果を引用するので付言しておくが、森本は北陸での土器編年について、とくに漆町2-2群の一部を月影式(漆町3群)に含めている。そしてⅤ-3期を法仏式に含めているようである。その事の議論を別とすれば、信濃との併行関

係について、的確な指摘をしている（森本2006a・b）。

註3 臼井1994、133ページ、第5表によった。

註4 青木4期が笹沢等Ⅰ期新段階を含めているのかどうか、今ひとつ明らかでないが牛出古窯SB05は青木4期としている（青木1988bほか）。

註5 Ⅱ期新段階には、青木6期の資料を一部含む。

註6 漆町8群が、資料的に不安定であること、漆町9群が一部布留式中段階新相と時間軸で重なる可能性をもつことなど、漆町編年の整理は必要と考えているが、大枠で、漆町8群が布留式中段階古相、9群が同・中相併行の土器群との理解は変わらない。

註7 能登形甕と千種甕については必ずしも同一の形式を指していない。議論ではその整理が必要と考えている。

註8 小島境2号住はⅡ期古段階とする。「越後系が多量にみられる」とする事例に該当しようが、北陸系小型鉢は漆町7群併行期より新しくできない。結合器台も古式の型式とでき漆町7群併行期まで遡上する可能性がある。Ⅰ期新段階とⅡ期古段階の時間軸と係る。

註9 信濃の該期資料は豊富である。漆町編年での未検討ないしは予測的理解に留まっていたことの具体的検討が可能な地域と考えている。今回は結論には至らなかったが、漆町13群古相併行期の理解、漆町14群併行期への移行過程等々で、大いに教わった。

註10 とくに該期資料に関してはほとんどを実見していない。報告書によった。その事から組成による検討が中心となった。

註11 千野2段階の標識とする二ツ宮FM5区13住（長野市1992）は、地元形式に不案内であるが漆町11群併行とみたいが、ご教示をお願いしたい。

註12 先稿（その1）では、粗製小型壺は、該期では特定遺跡に偏在し、次段階の漆町12群では偏在の一方で普遍化が進む可能性を指摘した。そして、石川条里での多量使用は古段階での顕著な事例とみている。

粗製小型壺だけでなく、小型丸底壺や小型器台等小型精製器種の多量使用もこのことと係わろう。石川条里では当該形式も多量使用されている。漆町編年では、漆町10群段階での小型精製器種の減少傾向を指摘したが、それは通常集落でのことと考えている。畿内では該期でも多用されるが、その状況をそのまま東日本域には適用できないとの予測でいる。同時に、その様相をもって漆町10群の併行関係を新しく捉えるのも誤りとする。東日本域の中世での土師器皿の使用状況、特定遺跡での偏在の在り方を参考に検討をすすめたい。

註13 このこととの関連で付言しておく。該期と次段階との識別は、椀・杯の有無が重要かつ分かりやすい視点となっている。しかし、次段階古相では、組成に占める椀・杯の構成比は少ない。高宮土器集積等では（松本市1994）希とさえいえる。しかも、後述するが、該期に椀を伴わない地域がある可能性も想定しておく必要がある。そして、遺構単位では、組成を網羅していないことの方が通常ともいえる。該期のみのことではないが、組成のみの操作では時期決定に曖昧さを伴う。当然のことながら該期に定量的にみられる甕、高杯や二重口縁壺、さらには粗製小型壺等の型式分類と時間軸での整理を大いに進めたい。

註14 図8-4・5の鉢とも椀ともいえる形式に注目したい。加賀では目立たないが、日本海側も含め東日本域には目立つ形式とでき、北信地域にも定量的にみられる。この形式は、系譜で、該期以降の薄作りの椀類につながるとみているが、境野新1号竪穴資料は粗製品で、印象的には粗製小型壺、ないし小型甕に近く、古相の型式ではその区別が難しい。当該形式については粗製小型壺の一連形式として椀の出現に先行してあるのか、あくまでも椀の出現と連動して成立する形式であるのかの整理が今ひとつできていない。

笹沢がⅢ期古段階、花岡がⅢ期1段階の標識とする駒沢新町3号祭祀遺構にも（長野県史1988）、このこととの関連で検討したい型式がみられる。笹沢、花岡のⅢ期古段階、Ⅲ期1段階の時間軸は、このことで保留としている。

註15 当該資料については、漆町12群併行「かと推定される」とした経緯がある（田嶋1987）。

註16 漆町編年での漆町13群と14群との様式的理解は、大枠で変更の必要はないと考えているが、その転換過程の検証で曖昧

さがあった。

註17 笹沢正史教示。

註18 当該甕は越後、信濃の他、会津でも定量的にみられる。関東域等での検索はできていないが、とりあえず越後、信濃、会津間での土器移動を考える資料とできる。会津の資料は、吉田博行、阿部 司、青山博樹等のお世話により実見。

註19 鉢部の幅に対して極端に口縁部を伸張したタイプや、口径が20cmを大きく超えない程度の小型のタイプ（御経塚ツカダ型式）は、越中、越後でもみられるが、当該型式は少なくとも顕在していない。そして御経塚ツカダ型式は、高橋編年庄内Ⅱ期新相から出現するようで（高橋2000）、越中（越後）では、前記の口縁部を伸張したタイプからの型式変化がおえない。今後確認される可能性は十分にあるとできようが、ここでは北陸南西部の可能性をもつ型式に含めておく。

註20 滝沢もこのことを指摘している（滝沢2009）。筆者も「大型建物群造営期の「越」の土器様相」で、このことと、漆町5群以降の伊勢経由太平洋ルートでの北陸南西部系土器移動の盛行、そしてこれら土器移動の変化を踏まえての万行遺跡の大型建物の評価に触れた。

註21 ここでの画期の設定は信濃への北陸系土器の移動からみたもので、註29等でも触れているように、漆町7群併行期にも土器移動で変化がみられる。その時点での土器移動についても評価していく必要があると考えている。

註22 中島庄一は、北信北部の資料から、吉田式→（尾崎式？）→（箱清水式？）の推移を想定している（中島1997）。該期の理解は尾崎式と関連する可能性をもつともいえるが、検討できていない。

註23 ここでの吉田式には青木2段階を含んでいるように思われる。

註24 青木一男教示。

註25 赤塩は2段階（新）に「東海系はわずかに伴出する」（赤塩1994）とする。2段階（新）は、土屋2段階、青木3期・6段階、新潟シンボ編年4期にあたる。

註26 高杯Dの出現がS字甕の波及に先行するのかどうかは微妙である。そのことはともかくとして、当該形式は東海・近江出自であったとしても、北陸経由の形式が影響を与えた可能性もある。波及元の検討対象地域は、当面、東海・近江に限る必要はない。

註27 北陸北東部でも、該期に多様な複合口縁壺・有段口縁壺が波及する。

註28 滝沢は口縁部の形状で大別分類するが、当該器台の分類は受部の形状を優先したい。その点で本例はⅡ類に特定できない。

註29 該期の土器移動について、Ⅰ期古段階のあり方を原則継承したとしたが、大きな変化もみられる。信濃と直接関連しないので本文では触れなかったが、越後（主に下越、阿賀北）と上野での土器移動で、従前は越後→上野が主体であったが該期に上野→越後への動きが顕在するようである。信濃、越後でも同様に変化していた可能性が高い。信濃での東海系形式の相対的減少も該期ないし以降での変化とできようか。

註30 小型丸底壺は、布留中段階古相から中相で大きく型式変化する。それは、型式変化ではなく畿内以外の地域形式を取り込んだ形式変化であった可能性も考えられる（先稿その1）。E1、E2にこだわった由縁である。

註31 灰塚H1は様相2での篠ノ井SB7508よりは新しいとみている。ちなみに笹沢・花岡はⅡ期新段階としている。なお、宇賀神はⅡ期古段階としているが、新段階を屈折脚高杯出現段階としていることから同列には扱えない。

註32 北陸南西部では多少は変容していようが、畿内系形式がストレートに波及する。ただ、関東・東北域で定量的にみられる小型器台Cは稀で、組成から欠落する。

註33 屈折脚高杯の在り方では、北陸南西部では原則、固有形式はみられず、当初より定型化した畿内系形式が波及する。尾張では当初より定型化した畿内系形式がみられるが、一方で固有形式も併存する。信濃では固有形式が定量を占め、定型化形式の出現時期は検討の余地を残すが、固有形式が先行すると予測され、定型化形式による斉一化は漆町10群併行にあった。未検討であるが東北では漆町10群併行期でも固有形式が顕在するようで、定型化形式による斉一化はさらに新しいと予測される。

東日本域での屈折脚高杯の動きを以上のように整理できるなら、富沢の指摘には、本文での筆者の指摘とは別の意味合いが含まれているようにも思われる。千野2段階以降での定型化した高杯の動きの整理、そして青木6期までの高杯と同一形式とできるのかも視野に、厳密な型式分類が必要となつてこよう。

註34 富沢の杯A、椀(杯)の丸底化の現象も同様に捉う必要もあろうが、今は評価できていない。

註35 加賀市・千崎遺跡6住でTK216型式(石川県教委1998)、同・永町ガマノマガリ11土坑でON46型式、同16土坑でTK208型式(石川県埋文1987)、小松市・漆町97土坑でTK23型式(石川県埋文1988)等の供件事例がみられる。

引用・参考文献

青木和明 1984a「箱清水土器の編年予察」『長野考古学会誌』48

1984b「小島境遺跡」『第5回三県シンポジウム 古墳出現期の地域性』千曲川水系古代文化研究所

1989「5土口將軍塚古墳出土土師器の編年の位置」『土口將軍塚古墳』長野市・更埴市教委

1990「体育館地点出土土器の位置付け」『篠ノ井遺跡群Ⅲ』(財)長野市埋蔵文化財センター

青木和明・飯島克也・若狭 徹 1987「箱清水土器と樽式土器」『弥生文化の研究』第4巻 雄山閣

青木一男 1984「善光寺平南域における古墳出現期の集落出土の土器」『第5回三県シンポジウム 古墳出現期の地域性』千曲川水系古代文化研究所

1989「土器にみる森將軍塚出現前後」『長野連埋蔵文化財センター紀要』3

1991「中部高地型櫛描文分布圏の東海系土器」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』Ⅲ東海埋蔵文化財研究会

1993「土器様相変化の素描」『長野考古学会誌』69・70

1996「まとめ」『上信越中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 大星山古墳群・北平1号墳』(財)長野県埋蔵文化財センター

1997a「2弥生時代後期の土器の分類と様相」「3古墳時代前期の土器の分類と様相」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書16 篠ノ井遺跡群 遺物編』(財)長野県埋蔵文化財センター

1997b「土器群の動態からみた御屋敷期」『長野考古学会誌』82

1998a「第4章 成果と課題」『上越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5』(財)長野県埋蔵文化財センター

1998b「信濃における土器群の画期と交流」『庄内式土器研究』16

1999「長野盆地南部の後期土器編年(発表メモ)」『長野県の弥生土器編年』長野考古学会弥生部会

2000「倭国大乱前後の箱清水式土器様式」『信濃』第5巻第11号

赤塩 仁 1994「第7節 弥生時代後期から古墳時代初頭の土器様相」『県道中野豊野線バイパス 志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書』(財)長野県埋蔵文化財センター

赤塚次郎 1990「廻間式土器」「土器・土器群の形成」『廻間遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター

1992「山中式土器について」『山中遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター

1993「東海系器台覚書」庄内式土器研究4

1994「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター

2002「総説 土器様式の偏差と古墳文化」『考古資料大観』第2巻

赤塚次郎・早野浩二 2001「松河戸・宇田様式の再編」『研究紀要』第2号 (財)愛知県埋蔵文化財センター

甘粕 健・春日真実 1994『東日本の古墳の出現』山川出版社

飯島哲也 1993「4本村東沖遺跡出土の古式須恵器について」『本村東沖遺跡』長野市教育委員会

岩崎卓也 1984a「シンポジウム「古墳出現期の地域性」にむけて」『第5回三県シンポジウム「古墳出現期の地域性」千曲川水系古代文化研究所

- 1984b 「古墳出現期の一考察」『中部高地の考古学』長野考古学会
- 1996 「中部山岳地方の4世紀の土器」『日本土器辞典』雄山閣
- 白井直之 1997 「中部山岳地方の4世紀の土器」『北陸自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15』（財）長野県埋蔵文化財センター
- 1994 「第2節 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書14』（財）長野県埋蔵文化財センター
- 宇賀神誠司 1988 「長野県における古墳時代前期の地域的動向」『長野県埋蔵文化財センター紀要』2
- 大村 直 1994 「戸張一番割遺跡の甕形」『史館』25
- 金井汲次 1982 「安源寺遺跡」『長野県史』考古資料編全1巻（2）
- 加納俊介 1991a 「土師器の編年4 東海」『古墳時代の研究』6 雄山閣
- 2000 「S字甕の分類を考える」『S字甕を考える』第7回 東海考古学フォーラム三重大会
- 川村浩司 1993 「北陸北東部の古墳出現前後の様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古協会新潟大会実行委員会
- 1994 「関東南部における北陸系土器の様相について」『庄内土器研究』4
- 1996 「弥生後期における北信濃と北陸」『考古学と遺跡の保護』甘粕健先生退官記念論集刊行会
- 1999 「庄内式併行期における上野出土の北陸系土器について」『庄内土器研究』19
- 桐原 健 1969 「長野県伊那市美簗笠原堂垣外遺跡調査概要」『信濃』21－4
- 1971 「北信濃の後期弥生土器」『一志茂樹博士喜寿記念論集』
- 1980 「信越両国間交流についての考古学的所見」『信濃』32－12
- 小林正春 1996 「中部山岳地方の5世紀の土師器」『日本土器辞典』雄山閣
- 駒見和夫・桜井秀夫 2004 「甲信」『日本玉作大観』吉川弘文館
- 小山岳夫 1990 「地域編年の再検討－弥生土器佐久地方様相と変化」『信濃』42－10
- 2000 「長野県の後期弥生土器」『東日本弥生時代後期の土器編年』東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会
- 坂井秀弥 1984 「新潟県の様相」『第5回三県シンポジウム 古墳出現期の地域性』千曲川水系古代文化研究所ほか
- 笹沢 浩 1970 「箱清水式土器の再検討」『信濃』22－4
- 1977 「弥生土器 中部 中部高地3」考古学ジャーナル NO134
- 1982 「駒沢新町遺跡」『長野県史』考古資料編全1巻（2）
- 1988 「4 古代の土器」『長野県史』考古資料編全1巻（4）
- 1987 「中部高地型の櫛描紋土器」『弥生文化の研究』4 雄山閣
- 1996 「中部山岳地方の4世紀の土師器」『日本土器辞典』雄山閣
- 佐藤信之 1987 「長野県」『東国における古式須恵器をめぐる諸問題』北武蔵古代文化研究会ほか
- 滝沢規朗 1994 「新井市斐太遺跡群の出土土器について」『新潟考古』第5号
- 2005a 「新潟県における古墳出現前後に盛行する装飾器台・結合器台について」新潟考古第16号
- 2005b 「越後・佐渡における弥生後期～古墳時代前期の「く」字甕について」『三面川流域の考古学』第4号
- 2005c 「30葛塚遺跡」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』新潟県考古学会
- 2009 「新潟県の月影甕」『新潟県の考古学Ⅱ』新潟県考古学会
- 滝沢規朗・野田豊文 2005c 「31椋3遺跡」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』新潟県考古学会
- 高橋 圭 1966 「北信濃須多ヶ峰弥生墓埴調査略報」『考古学雑誌』51巻3号
- 高橋浩二 2000 「古墳出現期における越中の土器様相」『庄内式土器研究』22
- 田嶋明人 1986a 「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』石川県教育委員会

- 1986b 「古墳出現期の土器群と「月影式」土器」『シンポジウム「月影式」土器について（報告編）』石川考古学会
- 1987a 「在地窯の成立と土師器」『東国における古式須恵器をめぐる諸問題』北武蔵古代文化研究会ほか
- 1987 「2 遺構・遺物の検討」『永町ガマノマカリ遺跡』石川県教委
- 1989 「北陸の黒色（赤彩）土器」『東国土器研究』第2号
- 1993 「北陸南西部の古墳確立期前後の様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会
- 1995 「土器と古墳時代」『北陸古代土器研究』第5号 北陸古代土器研究会
- 1996 「古代の食器様式をもとめて」『古代の木製食器』埋蔵文化財研究会・第39回埋蔵文化財研究集会実行委員会
- 2006 「白江式」再考」『岡岡康暢先生古希記念論集 陶磁器の社会史』
- 2007a 「北陸の古墳編年の再検討 第2部古墳編年と土器編年との対応関係」『阿尾島田古墳群の研究』富山大学人文学部考古学研究室
- 2007b 「法仏式と月影式」『石川県埋蔵文化財情報』第18号（財）石川県埋蔵文化財センター
- 2008 「古墳確立期土器の広域編年（その1）」『石川県埋蔵文化財情報』第20号（財）石川県埋蔵文化財センター
- 2009 「古墳確立期土器の広域編年（その2）」『石川県埋蔵文化財情報』第21号（財）石川県埋蔵文化財センター
- 田辺昭三 1966 『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
- 千野 浩 1992 「千曲川水系における後期弥生土器の変遷」『信濃』41-4
- 1993a 「2 本村東沖遺跡出土の弥生時代後期・北陸系土器について」『本村東沖遺跡』長野市教育委員会
- 1993b 「3 本村東沖遺跡における古墳時代中期以降の土師器編年について」『本村東沖遺跡』長野市教育委員会
- 1994 「（2）弥生時代の土器」『石川条里遺跡（8）』長野市教育委員会
- 2001 「2 出土土器の様相ー吉田式土器の基礎的研究ー」『長野吉田高校グランド遺跡Ⅱ』長野市教育委員会
- 寺澤 薫 1986 「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』榎原考古学研究所
- 辻 美紀 1999 「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学 大阪大学考古学研究室10周年記念論集』
- 2002 「河内地域における古墳時代中期の土師器」『長原遺跡発掘調査報告Ⅸ』（財）大阪市文化財協会
- 土屋 積 1993 「長野県域における集落・墳墓の概要」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会
- 1998 「第6節 成果と課題」『上信越自動車埋蔵文化財発掘調査報告書14』（財）長野県埋蔵文化財センター
- 東海考古学フォーラム三重大会事務局2000 「S字甕・二重口縁壺集成 長野県」『S字甕を考える』
- 栃木英道 1994 「能登地域の庄内並行期の土器群の変遷」『庄内土器研究』7
- 1995 「第8章 考察」『谷内・杉谷遺跡群』石川県埋蔵文化財センター
- 利根川章彦 1999 「北陸系装飾器台の系譜についての小論」『研究紀要』第15号（財）埼玉県埋蔵文化財事業団
- 鳥羽秀継 1998 「第3節古墳時代の土器編年」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書25』（財）長野県埋蔵文化財センター
- 富沢一明 1999 「長野県における古墳時代中期の土器様相（1）東信地域の様相」『東国土器研究』第5号
- 直井雅尚 1999 「③松本盆地の古墳時代中期土器編年と出川西遺跡Ⅵ出土土器の位置」『出川西遺跡Ⅵ』松本市教育委員会
- 直井雅尚・島田哲男 1999 「長野県における古墳時代中期の土器様相（3）中信地域の様相」『東国土器研究』第5号
- 中島庄一 1997 「第4章 まとめ」『栗林遺跡発掘調査報告書』中野市教育委員会
- 西村 歩 2008 「中河内地域の古式土師器編年と諸問題」『邪馬台国時代の摂津・河内・和泉と大和』香芝市教委、香芝市二上山博物館
- 日本考古学協会新潟大会実行委員会 1993 『シンポジウム2 東日本における古墳出現過程の再検討』
- 花岡 弘 1996 「6 中部高地」『古墳時代の土器研究 6 土師器と須恵器』雄山閣
- 早野浩二 2001 「志賀公園遺跡における古墳時代中期の土器について」『志賀公園遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター
- 原 明芳 1989 「長野県における黒色土器の出現とその背景」『東国土器研究』第2号

広井 造 1993「横山遺跡」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
 広瀬和雄 1992「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成 近畿編』山川出版
 広田和穂 1999a「古墳時代中期～後期」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12』（財）長野県埋蔵文化財センター
 1999b「長野県における古墳時代中期の土器様相（2）北信地域の様相」『東国土器研究』第5号
 前島 卓 1993「北陸系土器の動向」『長野考古学会誌』69・70
 森岡秀人・西村 歩 2006「第Ⅳ部 総括」『古式土師器の年代学』（財）大阪文化財センター
 森島 稔 1978『更級埴科地方誌史』第二巻原始古代中世編 更級埴科地方刊行会
 森本幹彦 2005「古墳出現期における地域間関係」『東京大学考古学研究室紀要』第19号
 2006a「信濃北部の円形周溝墓について」『物質文化』81
 2006b「長野北部と北陸の併行関係」（広域編年検討会資料）プリント
 矢島宏雄 1996「箱清水式土器」『日本土器辞典』雄山閣
 山下誠一 1999「長野県における古墳時代中期の土器様相（4）南信地域の様相」『東国土器研究』第5号
 谷内尾晋司 1983「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』石川考古学研究会
 吉岡康暢 1991『日本海域の土器・陶磁（古代編）』六興出版

引用報告書等

＜長野県教委・（財）長野県埋蔵文化財センター＞ 1988『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2』（上木戸遺跡）、
 1994『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書14』（鶴前遺跡）、1994『県道中野豊野線バイパス 志賀中野有料道路埋
 蔵文化財発掘調査報告書』（栗林遺跡 七瀬遺跡）、1997『北陸自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15』（石川条里）、1997
 『上信越自動車埋蔵文化財発掘調査報告書13』（がまん淵遺跡 沢田鍋土遺跡 牛出古窯遺跡）、1998『上信越自動車埋蔵文化
 財発掘調査報告書5』（松原遺跡）、1998『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書25』（屋代遺跡群）、1999『上信越自動車
 埋蔵文化財発掘調査報告書11』（春山遺跡）、1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12』（榎田遺跡）、2000『上信越
 自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書28』（更埴条里遺跡・屋代遺跡群）
 ＜木島平村教委＞ 2002『根塚遺跡・大塚遺跡・平塚遺跡』
 ＜飯山市教委＞ 1990『小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ』（上野遺跡）、1995『柳町遺跡』、1995小泉弥生時代遺跡、
 1995『須多ヶ峰遺跡』、1996『上野Ⅷ・柳町遺跡』
 ＜中野市教委＞ 1997『栗林遺跡発掘調査報告書』、1979『安源寺Ⅱ』、1999『安源寺城跡遺跡発掘調査報告』、2000『高遠山古
 墳発掘調査概報』
 ＜長野市教委・埋文センター＞ 1979『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一 鼎町その2』1982『浅川扇状地遺
 跡群 牟礼バイパス A・E 地点遺跡』、1986『浅川扇状地遺跡群 牟礼バイパス B・C・D 地点』、1988『町川田遺跡』、1990『屋
 地遺跡Ⅱ』、1990『篠ノ井遺跡群Ⅲ』、1991『中俣遺跡 押鐘遺跡 檀田遺跡』、1991『塩崎遺跡群（6）石川条里遺跡（5）』、
 1992『二ツ宮遺跡・本掘遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡』、1992『石川条里遺跡Ⅱ』、1992『篠ノ井遺跡群（4）』、1993『本村東沖
 遺跡』、1994『宮西遺跡』、1994『石川条里遺跡（8）』、1995『本村東沖遺跡Ⅱ』、1995『八幡田沖遺跡』、1996『吉田四ツ屋遺
 跡 三輪遺跡 藁河原遺跡』、1997『水内坐一元神社遺跡Ⅱ』、1998『水内坐一元神社遺跡Ⅲ』、2001『長野吉田高校グランド
 遺跡Ⅱ』、2002『四ツ屋遺跡Ⅱ』、長野市教委2006『水内坐一元神社遺跡（4）』
 ＜長野市教委・（財）長野県埋蔵文化財センター＞ 1998『北陸自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書5』（浅川扇状地遺
 跡群・三才遺跡）
 ＜長野市・更埴市教委＞ 1989『土口將軍塚古墳』、1992『屋代清水遺跡』
 ＜更埴市教委＞ 1969『生仁』、1971『下条・灰塚』、1982『五輪堂遺跡Ⅱ』、1985『五輪堂遺跡Ⅲ』、1987『五輪堂遺跡Ⅳ』、1988
 『五輪堂遺跡Ⅴ』、1989『生仁遺跡Ⅲ』、2000『屋代清水遺跡』、2002『屋代清水遺跡 附松田館』

<上山田町教委> 2002 『御屋敷遺跡』
 <上田市教委> 1989『琵琶塚Ⅱ』、1998『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告2』（国分寺周辺遺跡）、1998『浦田 A・宮脇遺跡』、2000『下町田遺跡Ⅱ』
 <丸子町誌編纂委員会> 1992『丸子町誌 歴史資料編』（社軍神遺跡）、1992『丸子町誌 歴史編 上』（社軍神遺跡）
 <東部町教委> 1989『高呂添遺跡 井高遺跡』
 <佐久市教委> 1984『北西の久保』、1986『瀧の峰古墳群』、1992『国道141号線関係遺跡』（下芝宮遺跡、下聖端遺跡）
 <長門町教委> 1984『長門町中道』
 <松本市教委> 1978『弘法山古墳』、1987『松本市赤木山遺跡群Ⅱ』、1990『松本市県町遺跡』、1990『松本市向畑遺跡Ⅲ』、1992『松本市堀の内遺跡Ⅲ』、1993『松本市山影遺跡』、1994『松本市高宮遺跡』、1999『出川西遺跡Ⅵ』
 <飯田市教委> 1986『恒川遺跡群』、1986『恒川遺跡群 一般国道153号線座光寺バイパス用地埋蔵文化財発掘調査報告書』、1988『恒川遺跡群《田中・倉垣外地籍》』、1991『清水遺跡』
 <（財）埼玉県埋蔵文化財事業団> 1993『中耕遺跡』
 <（財）新潟県埋蔵文化財事業団> 2002『八反田遺跡・高島遺跡（C地点・二期線）』、2005『下馬場遺跡・細田遺跡』
 <笹神村教委> 2002『腰廻遺跡』
 <上越市教委> 2008『釜蓋遺跡範囲確認調査報告書』
 <婦中町教委> 2002『千坊山遺跡群試掘調査 報告書』
 <小杉町教委> 1999『HS-04遺跡群発掘報告』
 <富山文化研究会> 1974 『富山市境野新遺跡発掘調査報告書』
 （財）富山県文化振興財団 2006『下老子笹川遺跡発掘調査報告』（財）富山県文化振興財団
 <石川県立埋蔵文化財センター・（財）石川県埋蔵文化財センター>
 1986『漆町遺跡Ⅰ』、1987『宿東山遺跡』、1987『宿向山遺跡』、1987『永町ガマノマガリ遺跡』、1998『漆町遺跡Ⅱ』、1998『美岬・千崎 B 遺跡』
 <金沢市・金沢市教委> 1992『沖町遺跡』